

シンポジウム

15年後の「こだいら」の未来を考える

報告書

平成18年(2006年)3月18日(土)開催

はじめに

小平市は、21世紀に入った現在、新しく平成18年度(2006年度)から15年間にわたるまちづくりを開始する。

平成18年度より第三次の新しいまちづくりの構想として、「こだいら21世紀構想」がスタートすることになるが、昨今、日本経済や地方自治制度は大きな岐路をむかえ、また小平市の財政環境も比較にならないほど厳しくなっており、また今後の分権型社会の進展は、今まで以上に「自己決定」「自己責任」が求められることになる。

また、この新しい「こだいら21世紀構想」では、新たな将来都市像を、「躍動をあたりに 進化するまち こだいら」とし、さらに、この将来都市像、すなわち「進化するまち」を実現するためには、私たち市民一人ひとりの持つ地域における「地域力」、こだいらの地域や経済や社会システムとして「民活力」、そして市全体を調整しまとめる「行政力」の3つの力が必要であるとしている。

今回は、この新しい「21世紀構想」がスタートするにあたり、いわば近未来の「こだいら」を考えることとして、「15年後の『こだいら』の未来を考える」という基本テーマを設定し、シンポジウムの開催を企画した。

シンポジウムは、平成18年(2006年)3月18日(土)に、ルネこだいら中ホールで開催されたが、第1部は、地域社会における様々な課題を考えるテレビ番組の等で活躍されているNHKアナウンサー・キャスターの堀尾正明氏をお招きして基調講演をお願いした。

第2部はパネル・ディスカッションとして、堀尾正明氏を引き続きゲスト・パネラーにお願いするとともに、庄司徳治氏(小平市玉川上水を守る会世話人)、堀内通成氏(元「ワークショップ『小平市まちづくり会議』代表」、矢野久子氏(小平手をつなぐ親の会会長)の3名をパネラーにお願いした。

今回のシンポジウムのコーディネーターは小平市長が担当し、合計5名のメンバーで15年後のわが小平市の将来について大いに論じてもらったところであるが、この報告書は、そのシンポジウムの記録である。

この報告書が、今後、近未来における「こだいら」のまちづくりのヒントとして、あらゆる方面に対して役に立つことが出来れば幸いである。

平成18年(2006年)3月末日

目 次

1 基調講演	5
--------------	---

まちの活力・魅力を考える

今「ご近所の底力」のパワーがまちを変える？

2 パネル・ディスカッション	13
----------------------	----

15年後の「こだいら」の未来を考える

みんなのパワーで まちを進化させるには

資料編

資料 1 シンポジウムの記録

資料 2 プログラム

資料 3 ポスター・チラシ

資料 4 アンケート集計結果

司会: みなさん、こんばんは。

本日は、お忙しいところ、多数、本日のシンポジウムにお出でくださりまして、ありがとうございます。

今夜のシンポジウムの司会をつとめます、小平市都市経営部の昼間と申します。

よろしくお願いいたします。

さて、今夜のシンポジウムの趣旨等は、お話ししますと長くなります。特に、行政の説明は長いので有名であります。

よって、詳細はお手元の「プログラム」をご覧くださいくと同時に、時間が進んでいくなかで、テーマ等が徐々に明らかになっていきますので、ここは、思い切って割愛させていただきたいと思いません。

今夜は、2部構成となっております、第1部は、NHK アナウンサーであり、またキャスターでもあります堀尾 正明様により「基調講演」、その後、10分間の休憩をはさみまして、第2部といたしまして、堀尾さんを含めた5名による「パネル・ディスカッション」を予定しております。

なお、全体を通じて、自由で、リラックスした雰囲気で行いたいと思しますので、休憩時間に限らず、お席を離れても一向に構いませんので、よろしくお願いいたします。

さて、本日基調講演をお願いしました堀尾正明さんにつきましては、人となりは「プログラム」に詳細がございますが、先日のトリノからのオリンピックの報告はもとより、近年では、NHK の番組、特に「難問解決！ ご近所の底力」では大ブレイクされまして、地域の活力の秘策を期待しているところでございます。

何はともあれ、まずは、堀尾さん、よろしくお願いいたします。

1 基調講演

まちの活力・魅力を考える

今「ご近所の底力」のパワーがまちを変える？

講師： 堀尾 正明氏（NHKアナウンサー・キャスター）

基調講演

はじめまして、NHKのアナウンサーの堀尾でございます。
NHKのアナウンサーなのでさぞかし話がうまいと思われておりますが、カメラがないとうまく話せない悲しい習性がありますので、流れるようには話せないと思います。私が担当している番組を通じて、また、いろいろ取材を通して、地域の力になればと思い、馳せ参じました。



「ご近所の底力」という番組を担当して3年になります。土曜日、日曜日の「サタデースポーツ」、「サンデースポーツ」を担当して4年になります。実は、「サタデースポーツ」というのが今年の1月からなくなったので、今日ここに伺うことができたのです。その前は、「ニュース 10」という番組を2年。さらに、5年間、「スタジオパークから、こんにちは」という番組の司会をしていた時代もありました。

先日まで、トリノオリンピックに行っていました。日本時間の毎朝、「ボンジョルノ」という声とともに日本に元気を届けようとしておりましたが、なかなかメダルに手が届かない。その「ボンジョルノ」が、あまりにもうるさいと、お叱りを受けてしまいました。荒川さんがメダルを取れなかったら、私は今日ここに立っていなかったかもしれません。2年前のアテネオリンピックの時には、史上最多の37個のメダルということでした。あの時はギリシャ語を使って、それが結構受けていたので、今回もその調子でやっていたのですが、選手たちの活躍とメディアの伝え方というのは、比例します。今回痛感しました。一生懸命「ボンジョルノ」と言っても、「成績が伴わないのに、何をそんなにはしゃいでいるんだ」とお叱りを受けてしまいました。

いろいろなテーマで、いろいろなところでお話をさせていただいているのですが、今日は「ご近所の底力」という地域活性化の話に絞って、お話していきたいと思っております。

まず、今日お越しいただいた、みなさんの年齢構成を知りたい。年齢構成を聞きますので、拍手でお答え下さい。

では20歳までの方。おひとり。

21 歳から 30 歳までの方。おひとり。

31 歳から 40 歳までの方。3人くらいですかね。

41 歳から 50 歳までの方。この中では若手です。

51 歳から 60 歳までの方。みなさんすごくお若くみえますよ。

61 歳から 70 歳までの方。だいたい中心層といえそうです。

71 歳から 80 歳までの方。私の大先輩にあたりますよね。

81 歳から 90 歳までの方。いらっしゃらない。

では、男性、女性でいきたいと思います。

男性の方。

女性の方。

やや男性が多いということで、ありがとうございます。

珍しいですね。私の講演では、主婦の方を中心に、女性の方が多いのですが、今日は男性の方が多くて、また、60 歳以上の方が多いということで、大変光栄です。

「ご近所の底力」というのは、3年前の4月にスタートしました。自分が担当していながら、この放送の影響に非常に驚いています。各住民の方々はもとより、行政、自治体のみなさんの反応が大きい。

例えば大阪府では、「ご近所の底力事業」というプロジェクトが立ち上がって、1,000 万円の予算を計上したり、茨城では、「ご近所の底力向上実験」というグループが行政の中にできたり、いろいろなところで、「ご近所の底力」という言葉をつけた行政のグループができています。そして、住民の力を引き出して、地域を活性化させようという動きがこの3年間で増えてきているのですね。いろいろなところで、無断で、「ご近所の底力」という言葉は使われています。そのぐらい、いろんなところで使っていただいているのです。

この番組をご覧になっている方は多いと思うのですが、よく聞くと半年に1回ほどしか見ていないといわれる方がいらっしゃるんですね。どれくらい見ているか聞かせて下さい。

ほぼ毎週ご覧になっている方。

1月に1遍くらい見られる方。

1回か2回見たことがあるけど、ほとんど見たことがない方。

全然知らなかったという方。

この番組を説明しますと、NHK の渋谷のスタジオに、30 人くらいの「お困りご近所」と称する、「あることに困った地域」の方にお集まりいただいて、同じような悩みを解決していくために妙案などをもとに動き出している全国の「まち」を3つ探し出してきて、芸能人等がリポートをします。場合によって、妙案のご近所の方にスタジオに来ていただいて、自分たちの解決策をプレゼンテーションしていただく、そして、解決に向けて、画策していただくという番組です。

これまで、130 ぐらいの「お困りご近所」にお集まりいただきました。地域で解決しなくてはならないことが、本当にたくさんあるということに私自身も驚いています。

ちなみに、どんなお困りごとでお集まりいただいたかというのを、ご紹介させていただきたい。

防犯、犯罪の問題がいま非常に増えてきています。空き巣、ひったくり、子どもの犯罪、放火、車上狙い、オレオレ詐欺、架空請求、悪質商法、電車の中の痴漢、街の痴漢、万引き、自転車泥棒、

マンションの防犯、集合住宅の空き巣・強盗等です。

それから、ごみ問題・・・ごみのマナー・分別問題、カラスの問題、若者のごみのポイ捨ての問題がありました。

そして、交通問題・・・抜け道の暴走、放置自転車、暴走する自転車、迷惑駐車、交通事故そのもの。

動物問題・・・犬の糞、猫のおしっこ、猫のしつけ、鳩の糞害、鼠の害、マンションのペットの糞否、猿のいたずら、スズメバチの被害、鹿の被害、熊の被害、

また、竹が家を襲うといったものまであります。竹は非常に繁殖力が強くて、家を根本から覆すという。藤沢で、そんなに過疎地ではないのですが、そういうものもありました。

それから、テーマ別で一番多いのが高齢化問題です。定年後の生き甲斐、スーパーの撤退、商店街の空洞化、転倒防止、高齢者ドライバー問題、お年寄りの閉じこもり、離れて暮らす親の世話をどうするか、終の住処をどうするか、老後の健康、お葬式、男の介護、痴呆の予防、認知症の早期発見。年をとっても働きたい、それを地域でどうするか、かかりつけの医者が足りない、というようなことをやりました。

それから、防災ですね。大地震、猛暑、水害、大津波、大雪、マンションの地震対策、最近いろいろ話題になっているマンションの耐震性、バス路線、電車が廃止されたという問題。

若者問題・・・若者のたむろ、若者が少なくて祭りができない、保育園が足りない、ニート対策、農家の嫁探しという問題もありました。

騒音問題・・・特に、マンションの騒音問題を取り上げています。

景観問題・・・落書き、捨て看板、ピンクチラシ、マンション建設の反対、空き家、空き校舎。

外国人とのトラブル、主婦のこづかい稼ぎ、週末に農業をして生き甲斐を探していくということもやりました。

食の問題でいうと、食の安全、子どもの食育、内臓肥満、糖尿病、脳卒中、歯の健康。

環境でいいますと、めだかがいなくなった、桜並木を守れ、温泉街の復活。

だいたい、これが今までのテーマです。

この番組の特徴は、そうしたテーマで集まってきて、妙案をご紹介しますよね。その紹介した後に、3カ月後、半年後、1年後と、またこの番組に来ていただいて、そのお困りの対策をどうしているのか、我々もチェックさせていただくというのが、一つの大きな特徴なのです。ですから、解決するまで、NHKのカメラ・取材が、「お困りご近所」をしつこく追いかけてさせていただく。

今までに完全に解決した、「お困りご近所」は10です。鳩の糞害、杉並区の子どもを犯罪から守る、同じく杉並区の空き巣被害はほぼゼロになったという報告をいただきました。

3年前の4月の第一回目に登場していただいた、杉並区馬橋地区という空き巣被害に悩むまち。ここは、平成14年まで毎年、届け出だけで100件前後の空き巣被害があったんです。馬橋地区というのは、JRでいうと阿佐ヶ谷周辺で、古い住宅と新しい集合住宅が入り組んでいる、典型的な東京のまち。とにかく空き巣に狙われる。

不思議なのは、空き巣に複数回入られている。現金だけではなく、例えば、マフラーとか、ひげそりしか持っていかなくなったということも含めて、空き巣がそのまちを狙っているという雰囲気があるところなんです。そこでは、月に1回はパトロールしているんですが、住民全体では、防犯対策を徹底

的には講じていませんでした。

結論からいえば、1年後にゼロになりました。翌年もゼロ。去年は1件ありました。先日は、石原都知事から特別表彰を受けました。

番組に出てくださいったというモチベーションもあるんですが、彼らが特別に何をしたというわけではないんです。

この時に我々が見つけてきた全国の妙案というのが、3つありました。一つは、兵庫県神戸市の団地で、徹底的に挨拶運動。挨拶を交わすことによって犯罪を減らしたという妙案。そして、愛知県春日井市。ここは行政も非常に防犯意識が高いのですが、防犯教室で元空き巣の人を講師に招いて、空き巣対策をしているという妙案。三つめは、明大前あたりの杉並区で徹底的に昼間パトロールをするという活動。派手な服を着て、熊よけの鈴、工事用の街路灯を持って、それを1日に2回か3回、パトロールしてまわるという、3つの妙案を紹介しました。

杉並区の馬橋地区のみなさんは、それを3つブレンドして、パトロール隊をつくり、元空き巣の人にも来てもらって、いろいろな対策を講じました。恒常的にやっていたのは、毎日パトロールする、チラシを配って、「うちのまちは空き巣に非常に厳しくなりましたよ」ということをアピールしました。そういうことをしただけで、1年で全く空き巣が寄りつかないまちに変わったんですね。

半年後、1年後に報告を受けて、難問解決をしたご近所としてテレビで放送したのですが、この番組に出ていただいた前と後では、ご近所のつながり方が全然違うんですね。それをきっかけに、お祭りなどのいろいろなイベントもするようになりましたし、何よりも、若い世代と年配の世代の交流、古い住民と新しい住民の顔がわかるようになるというように、劇的に変わったんです。こんなに住民の力を一つにすると、妙案の3つの例を自分たちに合わせるようなアレンジをするだけで、劇的に犯罪が減らせるんだなということを痛感しました。そういう例がたくさんあるんですね。

驚くことに、杉並区馬橋地区の「お困りご近所」で出ている30人のうち4、5人は、いま、空き巣対策の講演にまわっています。それぐらい防犯意識も高まり、空き巣に対する研究もして、対策を重ねていったということなんです。

聞いてみると、目から鱗が落ちることって結構あるんですね。我々が先入観として持っていることがある。私も元空き巣の方に話を聞いたんですが、その人は、空き巣の中でもベテランで10年間刑務所に入っていた人で、出てきてから社会に尽くさなければということで、空き巣対策に専念しようと、講演してまわっている方なんです。

例えば、空き巣が嫌いなのは、吠えない犬なんですって。普通、犬は吠えるから、防犯のために飼っているんですね。吠える犬は餌を持って行くと、90%以上は鳴きやむんですね。犬の種類によって、餌も替えます。空き巣はプロですから、わかっているんです。鳴かない犬というのは、いつ吠えられるか、飛びつかれるか、と経験上知ってますから、吠えない犬には空き巣は絶対近づきません。ですから、みなさんは静かな犬を飼って下さい。猛犬注意という張り紙は何の役にもたちませんと言ってました。

また、エアコンの室外機の上に何も置いていないと、空き巣というのは時間をかけずに2階に上がりたいので、そこから上がってしまうんです。そこに、植木鉢なり、ダンボールなんかを置いているだけで、それを下ろすのは時間もかかるし、目立つのでやらない。そういうことを、ひとつひとつ教えてくれるんですよ。地域力というのは、その積み重ねですね。

私の講演の時間もあと 15 分になってきたので、かいつまんで、地域の力を高めるためにはどうしたらいいかというのを、箇条書き的にお話します。

まず、自分のまちの弱点を知るということですね。私が生まれた昭和30年代というのは、地域の力がありました。地域が子どもを育てていました。私も群馬のある長屋に住んでいて、鍵なんかも掛かっていませんでした。母がパートに出ていたので、帰るとなぜかいつも隣のおばちゃんが台所に立っていたのを思い出します。駄菓子を買って帰ると、台所に立っているおばちゃんが、こんなわけわからないものを、お腹が痛くなるから返してらっしゃいと。なぜ血のつながらない人に怒られなきゃいけないんだろーと思いつつ泣く泣く帰ったのを覚えています。どうしてこの人が家にいるんだろー、とっていました。上に住んでいた、20 歳ぐらいのお姉さんには、自分の弁当を作ってもらった記憶もありますし、近くに住んでいたお兄さんとキャッチボールをした覚えもあります。私は確実に、地域に育てられてきたんですね。私以上の年齢の人は、そういう経験が多いんじゃないかと思えます。

空き巣対策というのは、考えてみれば、昔は必要なかったじゃないですか。地域のおまわりさんがいて、自転車に乗って地域を巡回していたり、それに対する我々の接し方というのもありましたし、まち全体が我々の生活を見守っていたという記憶が強い。

ただ、そこにはしがらみができてる。プライバシーがありませんでした。玄関は開けっ広げだし、自分の部屋も狭いし、隣の家には入れるし、他の人たちから監視されているような気もしました。

ですから、日本人は、昭和40年、50年と、自分たちの空間をつくるために、高度成長期をつくり、しゃにむに働いて、自分たちの空間をつくってきました。実際に、形は違えど、マイホームを手に入れましたよね。

結果、何が起こったかという、地域でしか解決できないような問題に極端に弱くなってしまった。しがらみはなくなったけど、つながりがまったくなくなったというのが、21 世紀の日本の姿だと思っています。

しかも、外国人犯罪が増えている。子どもたちへの犯罪も増えている。犯罪といっても、昔と違って非常に多様化しています。インターネットとか、メディアの発達によって、地域を通り越して、個と個がつながるようになってしまった。こころが空洞化してしまっていますよね。情報はいろいろ入るんだけど、フェイス・ツー・フェイスのつながりがなくなってしまった。それによって、いろいろと問題が山積してきてしまったんです。

それを行政に、警察に頼ろうとしてきたんですが、犯罪がこれだけ多様化してきて、件数も増えてきて、そして、住民の要望も、種々雑多になってきている。行政側も、予算も人数も限りがあって、それに対応しきれなくなっているんです。だから今、こういう形で講演に招いていただいているのも、行政も自分たちの手に負えなくなっているというのが、正直なところだと思います。

住民自身で提案して、住民自身で施策や、やりたいことを実現してほしいと、それに対して、行政は、手を貸したり、お金を出したりということをしませう。あくまでも、住民中心に動いてほしいというのが、21 世紀の姿ではないかと思えます。

ただ、行政というのは、税金をあまねく公平に使わなくてはならないのですが、声大きいところ、あるいは活動が活発に見えるところ、あるいは一生懸命やっているところなどに、目が向く。行政の提案もベクトルが向かうわけですよ。

住民自身が動いていますよ、やっていますよということを見せることがすごく重要なんです。もちろん、中身の伴ったパフォーマンスですけども、それを、ぜひみなさんにもしていただきたいと思いません。

番組をやっている立場から、一つひとつ具体的なテーマをやっていく上で、ヒントを申し上げます。ひとつは、自分のまちの弱点を知るということということです。自分たちのまちにはどんな欠点があり、弱点があり、ほかのまちと比べて足りないことがあるかということを見抜くことだと思います。

それから、妙案の先例というのは、必ずどこかでやっています。困ったなということがあったら、NHKのアーカイブを含めて、番組やインターネットを見ていただければ、お困りごとに対して動き出している自治体、住民がいるんです。日本の中だけでなく、世界に目を向けてみると、必ずあるはずなんです。そういう、妙案の先例をしゃにむに探してほしいということなんです。

そして、なにより住人のグループをつくるということですね。住民たちで立ち上げる。行政には頼らず、自分たちが中心となって、グループをつくる。つくる上で大切なことは、既存の自治会とか、グループに、お困りごとを合わせるのではなく、その一つのテーマ、お困りごとに合わせてグループをつくっていくということ。そのグループには、固まったメンバーだけではなく、広く人を募り、世代も若い人からご年配まで、情報を常に外に流していくことが大切だと思います。

そして、グループ活動・住民活動をしていくと、行政や自治体に頼らなければならないことが出てくる。その時、必ず壁があるんです。決まりは決まりですからとか、前例がありませんからという形で、行政に遮断されることが結構多いんです。そこで、挫折する住民運動というのはたくさんあります。そこを、どう乗り越えられるかが、グループ活動が果実をもぎ取れるかどうかという分岐点になるんですね。その壁の中の一つに、条例とか法律というのもあるんです。

法律を乗り越えた一つの例を挙げます。ピンクチラシを含めた、不法看板がありますよね。公道に、不動産や風俗、ピンクチラシが氾濫しています。我々住民は勝手に撤去できない。それは、公道の駐車違反を勝手にレッカー移動できないのと同じような理屈で、広告主の財産権を守るために、我々は勝手にできないんです。明らかに放置されて、持ち主なんかも無視しているだろうと思われるものでも、我々は勝手に撤去できない。撤去すると財産権の侵害で、訴えられるんですね。

じゃあ、どうしたらいいかというと、行政に連絡をして、行政は広告主に連絡して、ある一定期間取りに来なかったら、行政が代執行という形で取り除くんです。でも、そういうのはまちにたくさんあります。しかも、いちいち住民から撤去してくださいと言われても、行政にも人数に限りがありますから、できない。そこで、住民が代わりに、腕章をつけて、私は行政の代行ですよという仕組みをつくって、住民が撤去できるようにした自治体もできました。

宮城県では、ピンクチラシに限っては、住民誰でもはがしていいという条例をつくってしまいました。ピンクチラシは広告主が貼って、手を離れた時点で財産権を手放しているんじゃないかということで、弁護士グループといろいろと研究して、そういう解釈でいいだろうということで、ピンクチラシは誰でもはがしていいようにした。そういう条例にしたんですね。それも、実は10年ぐらい前に、仙台市駅前の商店街で、3人から始まった住民運動から、条例がつくられた。そこまで世の中の仕組みを変えてしまったんです。そういうふうな形にして、世直しをしていくというか、壁を越えていくグループがたくさんあることには、驚かされます。

もう一つ例を挙げると、バスとか鉄道なんか住民が手出しできるものではないと考えている方が多

いと思います。いま、道路運送法や鉄道事業法などの改正によって、いわゆる規制緩和なのですが、いままで免許制だったものが、許可制になって、どんどん企業が参入しやすくなった。逆にしやすくなったということは、採算があわないと廃止しやすくなった。その改正によって、過疎地ではバス路線や鉄道が廃止になってきています。特に、高齢化がすすんでいるまちなどでは、足がなくて、買い物や病院に行けないというお年寄りがたくさん出てきているんですね。

それを何とかしようということで、四日市では、住民がバスを運営してるんですね。廃止したバス会社のバスを1台借り受けて、運転手を雇い、月に80万円かかりますが、日に5本運行しているんです。その80万円は、20万円は市から、20万円は商店街から、あとの40万円は、病院とか公的機関から細かく集めて、それで運行している。そういうことが可能になったんです。バスを住民が運行しているということなんですね。

また、福島県の小高町などでは、タクシー会社と商工会が一緒になって、バス路線や鉄道が廃止になった地域に、乗合いタクシーを巡回させています。ひとり100円で、予約制なんですけど、高齢者などを戸口から戸口まで乗せている。前の日に予約して、商店街まで連れて行き、4、5時間後、「またここに来てください」と言って、乗合いタクシーに乗せて帰して行く。そういうシステムを住民グループがつくってしまったんです。

普通、そんなことできないでしょう、と思いますよね。特にこういうインフラ関係は。でも、ご近所がやったという例もあるので、高い壁とか、方向転換しなければならないと思う前に、必ず、そういうお困りごとには先例があるので、それをしゃにむに探していただければと思います。

住民運動が挫折したり、方向転換しなければならない、必ずそういうタイミングがある。そこで、どう踏ん張れるか、どう頭を切り替えられるか。自分たちのまちでは、防犯のためにパトロールの人が集まらないというのであれば、街灯をたくさんつけて、明るいまちにするとか。そういう街灯の資金は、自治体によって、防犯対策・防災対策などにはお金を払うシステムになっているところもありますから、そういうことを利用する。知恵と工夫をもって、ぜひやっていただければと思います。

今日は、シンポジウムでは質疑応答はないとのことですので、私の持ち時間が3分ぐらいあります。せつかくですから、番組についてでも結構ですし、地域の活性化についてでも結構です。何か質問などありましたら、お受けしたいと思いますがいかがでしょうか。

Q: 妙案の見つけ方について、どういうことをしているんですか。

A: 今は妙案を募集して、先方からの提案していただくことも増えてきましたが、当初はアンケート用紙を各自治体に配布して、困りごとはなんですか、それに対する妙案があったら教えてください、ということで、数万のアンケートを採って、それをもとにしてやっていました。あとは、インターネットの力が大きいですね。それから電話での取材もあります。そこから、「ごみ問題についてだったら、私たちはこんなことをやっています」という、情報が流れてきます。ありとあらゆるツールを使って、情報を集めているのが現状です。NHKは全国に54局ありますので、NHK独自の取材網も利用しています。

Q: 出版物みたいなものは出ていないのですか。

A: ご近所の底力の本は1年目に1冊出ています。それは、ぜひ買っていただければ、それまでの問題、ごみ問題、カラスの問題などは出ているので、見ていただければと思います。こんなことでこんな困りごとに向けて動き出そうとしているんですが、何かヒントはないでしょうかと、私ども、あるいはNHKに問い合わせさせていただければ、NHKではそれに対して、丁寧にお答えするつもりでございます。

また、「ご近所の底力」というのは、NHKのホームページにございます。今までのテーマや妙案のあらすじが書いてあります。それをヒントにいただければと思います。具体的なことを知りたいという方は、NHKあるいは私まで問い合わせさせていただければ。また、私がないときには、プロジェクトにつなげろと言っていただければ、丁寧にお答えさせていただきます。

Q: ご近所の底力をいつも熱心に見ています。それで、いつも洋服がとても似合っているんですが、ご自分で選んでいらっしゃるのでしょうか。ファッションコーディネーターがついていらっしゃるのでしょうか。

A: ファッションコーディネーターがおります。

今日はネクタイで来ようと思ったんですよ。ただ、小平の方がラフな格好で来てくださいということで。私はネクタイが一番似合うと思っているんですが、わざわざ外してきたんですが、どうでしょうか。これは自前です。いつもはコーディネーターがついています。お化粧品もして出ています。眉も書いています。余談ですが、テレビでは少し太って映るんですね。ですから、シャドーをつけて細く見せたり、いろいろな工夫があります。

今日はみなさん、私の話の内容を聞いてくださったでしょ。でも、テレビという媒体は、一生懸命こういう話をしている時に、「この人のネクタイ、趣味悪いなあ」って思われた瞬間に、内容が飛んでしまう。だから、我々はテレビに出る上で、髪型とか、顔とか、ファッションも含めて、マイナスの情報が出ないようにすごく心がけている。例えば、私がペ・ヨンジュンみたいな顔だったら、顔が気になって、私の伝えている内容がだめになる。かといって、ものすごい変な顔だったら、またそれはそれで変でしょ。内容が伝わるためには、どうしたらいいかと、いろいろ考えながらやっています。

私は1本額に皺があるんですが、「皺が気になって仕方ない」という電話をこの10年間で5本受けました。「その皺を直してくれないと私は受信料を払いたくない」とまで言われました。2人の方には、整形外科を紹介されました。それくらい、ビジュアルのところは気を使いながら出ています。

そろそろ巻きが入っていますので、このあとはシンポジウムの中で話させていただきたいと思いません。ご清聴ありがとうございました。

〔休憩 10分〕

2 パネル・ディスカッション

15年後の「こだいら」の未来を考える
みんなのパワーで まちを進化させるには

ゲスト・パネラー 堀尾 正明氏（NHKアナウンサー・キャスター）
パネラー 庄司 徳治氏（小平市玉川上水を守る会世話人）
パネラー 堀内 通成氏（元「ワークショップ
『小平市まちづくり会議』代表」）
パネラー 矢野 久子氏（小平手をつなぐ親の会会長）

コーディネーター 小林 正則（小平市長）

パネル・ディスカッション

司会: それでは、ただ今より、後半の第2部として、「パネル・ディスカッション」を始めたいと思います。

本日は、第1部で「基調講演」をお願いしました堀尾正明さんにも、参加いただきまして、各パネラー4名、コーディネーター1名の、合計5名でございます。

各パネラーのご紹介をしたいと思います。まず、みなさんより、向って左側より、パネラーの方々を紹介させていただきます。

最初は、第1部の基調講演に引き続きパネラーをお願いいたしました、堀尾正明さんでございます。今回のゲスト・パネラーとしてお願いいたしました。多彩なご経歴につきましては、プログラムをご参照頂きたいと思います。

次は、庄司徳治さんでございます。「玉川上水を守る会」の世話人のお一人として、長年にわたり玉川上水の保全をはじめといたしまして、ご活躍をされております。

次は、堀内通成さんでございます。堀内さんは、建築関係のお勤めのかたわら、平成16年度には、9カ月にわたり開催されました「ワークショップ小平市まちづくり会議」の元リーダーでございます。

次は、矢野久子さんでございます。矢野さんは、「小平の手をつなぐ親の会」の会長さんとして、障がいがある方々のよき相談相手、リーダーとして活躍されています。

最後は、最も左側におります、コーディネーターでございます。今回のシンポジウムでは、小平市長の小林正則が務めさせていただきます。

それでは、小林市長にバトンタッチをさせていただきますので、よろしく願いいたします。

コーディネーター(市長):みなさま、こんばんは。

コーディネーター役を務めさせていただきます、小林正則です。

今回のテーマは、「15年後のこだいらの未来を考える」、サブタイトルとして「みんなのパワーでまちを進化させるには」ということで、近未来である15年後までの間に、みんなのパワーでいかにまちを進化させていくのかというテーマでやっていきます。堀尾さんの話が非常におもしろかったものだったので、堅苦しいテーマでやりづらいですが、できるだけ親しみやすい、和やかな雰囲気を進めたいと思いますので、どうぞ最後までよろしくお願いいいたします

パネラーのみなさんをご覧になって、通常、「シンポジウム」とか「パネル・ディスカッション」というと、どこかの大学の先生や理論家といわれる専門家が必ず座られるのですが、今回はそういう意味では異色です。矢野さんは障がい者団体の会長として、前線に立ってさまざまな課題に取り組んでおられる。堀内さんは、基本構想に際して市民会議で、非常に精度の高い提言書をつくっていただきまして、おおいに参考にさせていただきました。まちづくりに対しては、地域を代表する活動家また運動家でもあります。庄司さんは、みなさんご承知のように「玉川上水を守る会」の世話人で、小平市にとってはなくてはならない人です。長い活動の成果として清流復活が図られ、数年前には、文化財保護法の史跡指定を受けて、これをどう活用していくのかと現在も精力的に活動されています。堀尾さんは、「ご近所の底力」で、市民がどう行政に関わるか、アナウンサーとしてその前線で行ってあるわけです。そういった意味で顔ぶれも、今までにない「パネル・ディスカッション」、「シンポジウム」として、ご期待いただければと思います。

本日は時間に制約がございますので、私はあまり話さず、全体がうまく回るように、やっていきたいと思えます。

それではさっそく、堀尾さんから6~7分お話しただきたいと思えます。小平市の印象を含めて、お話をしていただければと思います。

堀尾:講演に続きまして、私からで僭越ですけれども、私は埼玉県に住所を置いていて、高校まで埼玉、大学は東京ですが。小平というのはお世辞抜きで、文教地区で、緑豊かで、ものすごくおしゃれなイメージがありました。

実はNHKの中野の寮にいる時、子どもも大きくなり始めたので、環境も求めて、ちょうどバブルがはじけた頃ですが、小平にも家を探したのですが、ものすごく高かった。国立に行き、国分寺をまわり、小金井なども行き、最終的に八王子になりました。

ですから、ある意味、小平というのは私の憧れ、一橋大学というのも私のひとつの憧れの大学でもあったのです。そう意味も含めて、いったい何の問題があるのかと、こんなに環境がよくて、イメージはものすごくいいのです。埼玉の人間にとっては、小平というのはとてもおしゃれなまちであります。

みなさんにいろいろ話を聞くと、へそがないとか、繁華街がないとか贅沢な悩みを言っている。他の地域と比べると、犯罪も少ないですよ。どんな問題があるのか、興味津々な気持ちで今日はやってまいりました。小平には悪いイメージがありません。



コーディネーター(市長): 確かによく言われるのですが、ヘそがないとか、市の中心はどこだとか、問題は本当にあるのか。そのことが逆に問題ということもある。

行政はだいたい中心があり、ターミナリティみたいなところがある。小平市は7つの駅があり、それが特徴でもあるが、そこが活かされてない。それがこれからの課題にもなると思います。

それでは、次のゲストの庄司徳治さんに、玉川上水に長く関わってこられた経過を含めて、よろしくをお願いします。

庄司: はじめまして、庄司徳治です。玉川上水に関わること30数年、今回の15年後の小平をどうすべきか、非常に大きなテーマですので、私一人によって云々ということではできない、というひとつのけじめもつけながら、これから、みなさんにお話しさせていただきたいと思います。

小平に顔がある、ないということですが、私は小平に住み着いて40数年になります。ご存知のように、武蔵野の原野を開拓することによって、今日の小平になったということです。それは、玉川上水から用水を引くことができた、その条件がひとつある。それは、よそと比較して、原野を行政により開拓して、今日の18万の市民を抱えているというところは、全国広しといえども、他にはないのではないかと、これがひとつの顔です。



もう一つは、当時の開拓の農地の顔です。短冊形の農地ということで、地割とも言いますが、非常に整然とした畑が、だいたい同じ規格のもので、青梅街道をはさんで、北側は野火止用水、南側は玉川上水まで、整然とあった。これが当初の小平の顔です。

もう一つは、そこに住むためには、3月から5月にかけて畑の土ぼこりが立ちますので、それを囲むために屋敷林という独特の住まいをつくった、というのがこの小平の顔ではないか。

この3つのことが小平の顔ではないかと思います。

そういうところに生き様を求めて、これから今日までできた、歴史的な検証といいたいでしょうか、歴史的な背景、あるいは事跡を今後検証しながら、先輩方の功績を次の世代の人々に残していくような義務もあるのではないかと、この3つの顔を、具体的に掘り起こして、具体的な検証を課せられているというのが、私からみなさまへのテーマでもあり、報告でもあります。

コーディネーター(市長): 玉川上水は小平市で知らない人はいないくらい、歴史的、財産的価値というのが知られています。それを、次の世代にどう引き継ぐのか。緑が確かに多いのですが、近年農地がどんどん減っているのです。それが、今後の大きなテーマであろうと思っています。

それでは、堀内さん、市民会議等に参加され、まちづくりの提言書(=市民提言書)もいただいています。そのあたりのことも含めて、自己紹介をお願いします。

堀内: はじめまして。サラリーマンの堀内です。まちづくりに関わって、2年ぐらいいしか経ってないのですが、どうしてこのようなベテランの方に混ざってここに座ることになったかという、いきさつを話

したいと思います。

2年ほど前までは、他のサラリーマンと同じように、会社と家を往復する生活だったのですが、一昨年暮れぐらいに、妻が小平市報を持ってきました。

私はそれまで、はっきりいって小平市報を読んだことがなかったのです。そこには、ワークショップまちづくり会議の市民公募というのがありまして、その頃は時間的余裕もあったので、応募しました。職業柄、まちづくりに興味があったということもあります。



まちづくり会議とは何なのかというと、将来のまちづくりのための長期総合計画を策定するための作業の一環で、市民からの提言を求めようと、小平市が企画したものです。年が明けて、1月に出向いてみたのですが、40名ほどいました。抽選だと思っていたので、「応募者は何名なのか」と聞いたところ、これが全部だという話でした。これが今後最大の問題になるのだろーうと思いました。

まちづくり会議をしていて知ったのですが、小平は18万人都市なのですね。18万都市の15年後の計画を市民から求めようとしたときに、集まったのが40人だった。そういう状況だったのです。

まちづくり会議は、1月から始まって9月まで9回、月1回の定例会を持つということと、4つのグループに分かれて、最終的には提言書を提出するということが、私たちに与えられた課題でした。私の属した「まち」グループは、たまたま他のグループよりも人数が多くて、一人ひとりが意見を言っていくと、一巡するだけでだいたい1日が終わってしまうということもあったので、では月2回やろうじゃないかということで、合計20回ほど集まりました。

小平に住んでいても、家と会社の往復だけであまり知らないなということで、みんなでまちを歩くということもしました。花小金井駅の北口の改札の問題や、花小金井から小平の駅まで狭山・境緑道を歩いたり、鷹の台駅前を歩いたり、3・3・8号線の都市計画道路の問題や、それから玉川上水をよく知っている方に案内していただいたり、本当にわずかだったのですが、みんなそこで気がついたことが多かったのではないかと思います。

10月に提言書をまとめて、前市長さんに提出しました。その頃から、審議会というのが始まりました。その審議会を傍聴しようじゃないかということで、有志の方が出向いたのですが、提言書がなかなか反映されないなという思いがあり、次の年に「提言書を反映させる会」というのを設置しました。その後、市からも素案が出て、市長さんの方に素案と提言書の比較表をつくって、直接訴えました。それが今年の1月16日で、その甲斐あってか、私が今日ここに座っているといういきさつです。

まちづくり会議を通じて一番思ったことは、初めに言いましたように、18万人都市で40人というこの無関心さ、はっきりいって私も2年前までは40人の外にいた人間なのです。それがまず思ったことです。

もうひとつは、市が企画し、自分たちがつくった提言書や「提言書を反映させる会」の提出した提言が、本当に反映されているのか、今後、こういう市と市民の協働をどのようにやっていったらうまくいくのか、これが15年後の小平がよいまちになっているかどうかのキーワードだと思います。

コーディネーター(市長):私も堀内さんのグループと何回か話をさせていただきましたが、本当に内容は精度の高いものです。本当は全部取り入れるというのがいいのですが、なかなか行政と

というのは過去の継続性みたいなものがあり、積み上げてきたものもありますので、将来的にはともかく、今すぐということはなかなかできない。将来的には課題としてできるものがありますということで、お会いしました。

逆に、市にもこういう人たちが、しっかりと市の行政に対して関心を持って、非常に前向きに取り組んでくださるという意味で、明るい兆しを感じました。

それでは、矢野さんよろしくお願いします。

矢野:「手をつなぐ親の会」会長の矢野久子でございます。「手をつなぐ親の会」、どんな会かとお思いでしょうが、少し会の説明をさせていただきたいと思います。

知的障がいを持つ人とその家族の会で、小平では30年以上前から活動しております。結成から、障がい者の全員就学、卒後の日中の働く場の作業所づくりに取り組んできました。今は、障がいのある人が地域で暮らし続ける環境づくり、市民のみなさんの理解を得るための活動にも取り組んでおります。



私はこのような場で話すことは、正直申しまして、初めてでございます。なぜ、ここに出てきたか、それは知的障がいの人のことをもっとみなさんに知ってほしい、その一念で引き受けました。福祉の代表がこういう場に出てくることはよくございますが、知的障がいに焦点が当たることはあまりございません。ですから、今日は意を決して、どきどきしながら出てきました。

今日、私は知的障がいの子をもつ親として話をさせていただきます。障がいのある人が、どんなまちが住みやすいかということをお話します。特別な立場の人の話ではないかと思われるかもしれませんが、障がいのある人が住みやすいまちは、だれにでも優しい住みやすいまちであります。

私には、3人の息子がいます。真ん中の息子に、知的障がいや自閉症の障がいがあります。その頃は小平に住んでいたわけではありませんが、上の子と同級のお母さん仲間に大変助けていただきました。そのときに、本当にお世話になるばかりですから申し訳なく思ったのですが、その方たちは、「私も助けてもらった時期がありました。矢野さんも助けることができる立場になったら、その時に助けを必要としている人を助けてあげればよい。だからいまは気持ちよく、助けを受けてください」と言われました。

夫も私も地方出身ですから、身近に助けてくれる親や親戚はいませんし、保育園もすぐには入れません。本当に助かりました。ただ、個人でお願いするのは、たいへん気持ちが重くなることもありますし、金銭的にもどのようなお礼をすればよいのか、悩みました。ですから、こういうつながりというのは、個人的なつながりではなく、どこかが関わりをコーディネートしてくれる、そういうところが必要だと思えます。

今の子育ては、私がしていた頃よりもっとたいへんようです。特に、子どもの発達に心配がある場合は、体力的にも疲れますが、子どもの障がいを受け入れるのが最も大変です。孤独感と閉塞感で、出口のない狭い道を歩いているような気にもなりました。この時期に、両親、特に子育てを中心になって担う母親に、どんな子も大切なよ、一緒にやりましょうというメッセージを送ってくださる、そんな人たちの住むまちだったらいいなと思います。そのためにも、身近に、障がいを持っていて

もみんなに受け入れてもらえ、はつらつと暮らしているという実態が見えるまちであってほしいと思います。

成人を迎える息子の将来を考えますと、親の高齢化で、私たちの助けや見守りができなかった時、どうするのだろう、どうしようかと思います。施設の生活しか選択肢のない時代もありましたが、今は数人の人が一般の家で職員さんの助けを借りながら生活をする、グループホームの形態も可能になってきました。国や市の制度も必要ですが、それと同じくらい、市民のみなさんとの関わりが重要になってきます。まちのなかにあって、地域の人たちと自然に関わり合いながら、地域の人に支えられ、同時に障がいのある人とともに生きる地域に変えていく、そういう役目がグループホームにはありますし、みなさんの暖かいまなざしと見守る目で、グループホームの生活が成り立っていくと思います。

コーディネーター(市長):前線でいろいろご苦労されている、思いが伝わってきます。

午前中、花小金井のグループホーム、アンダンテの開所式がありました。4人の方がそこで生活していきます。どんな障がいがあっても、地域の中で暮らせる社会をどうつくっていくのか、どう受け皿をつくっていくか。小平市だけではできませんが、東京都の財政的な援助や、国の制度的な整備が必要になってくようかと思えます。また、次の機会に具体的ないろんな話を聞かせていただければと思います。

次からは、それぞれ挙手をしていただいて、大きなテーマは、「こだいらの未来を考える」ということで、何でも構わないので、ご自由をお願いします。

では、庄司さん、5分ほどでよろしくをお願いします。

庄司:先ほどは、小平の顔ということで、かいつまんだ話をしましたが、そういうものについて肉付けをどのようにすれば、小平の顔が見えてくるのか考えてみました。

そのひとつは、小平は生まれてから350年で、アメリカの生誕を考えると、100年ほど先輩になりますが、武蔵野の原野をこれほどまでに開拓して、今日に至っているというのは、日本の中では一番新しい村だという結果にもなっています。

それを裏付ける生活史の記録とでもいいましょうか、「小川家古文書」という形で、膨大な生活の裏づけの資料があることは、全国的にいて非常に貴重な資料でございます。その発展的なまとめとして、昭和56年に小平町史が生まれたのですが、小平町史の評価を考えると、全国的な歴史学者あるいは市史編纂を考えると、まさに頂点に立った論述の仕方、社会科学的な裏づけのある内容の濃い、金字塔的な意味の市史編纂であったということが言えます。今日も、そのスタイルといいましょうか、序文から終盤までの間の解説については、まったくこれをバイブル的に活用している、そういう存在価値があるといえるのではないかと思います。

それから、生活にそれぞれある、小川用水なり、新堀用水の、命の水を運んだ分岐堰とか、分水口とか、水車とか、そういうような生活の生き様をもう一度、温故知新というか、見直したり、再発見するということに今後力を入れて、小平は小平らしい誇りがあるんだという裏づけをこれからも継承していくのが、我々に課された「課題」ではないかと考えています。

コーディネーター(市長):小平市は350年、まちの歴史としては新しい歴史になると思います。そういう意味で言えば、歴史という点で言えば、非常にまだ浅いのだろうと思います。そこに住む人たちの思いというのは、

古い新しいということではないと思っているので、歴史的遺産、財産、人的なことも含めてどう生かして、どう次に継承していくかということが、これからの課題だろうと、私もまったく同感です。

それでは、堀内さん、よろしくお願いします。

堀内:小平が東京でどういうふうにもみられているかというお話なのですが、まちづくり会議でも集まって、小平グリーン・ロードとか玉川上水があるのですが、それ以外に「小平ってあまりないよね」という意見があって、小平霊園は有名なのですが、それぐらいかな、というようなイメージがあったんです。今日、庄司さんの話を聞いていて、そういう歴史があるんだ、屋敷林というのがあるんだ、と知ったのです。先ほど私が課題として取り上げた、市民が無関心でいるということはどうやって解消していくのか、どうしたら「まちづくり会議」を開いたときに、もっとたくさん人が集まる小平市になるだろうかということ考えていかなければと思うのです。簡単にいうと、市民意識を育てるということになるのだろうと思いますが、そう簡単にはいかない。

職業柄、景観というのを非常に重んじていることもあり、まちに関心をもつ仕組みをつくっていくために、いわゆるまちづくりに関心を持つために、景観が最も手っ取り早い方法ではないかと思いません。それを、今からまちに関心を持つと言ってもなかなかいかないなので、教育というのを小さい頃から始めなければならないのではないかと思うのです。

堀内さんの講演にあったように、30年代は、あの頃は、優しさとか、そういったものをいっぱい持っていたのです。最近感じるのは、そういう優しさとか、美しいものに対する感性が減ってきているのではないかというイメージがある。それは、ものやまちに対する優しさとかにも通じるのではないかと思いません。景観を教育の中に取り入れて、自分のまちを知るという教育をやっていくことによって、まちをみていく、観察していくという方法を、景観というのは家や電信柱だけでなく、人が動く、たとえば、車椅子の人がどう動くのかということも、動く景観を含めて、観察するということを提案したいと思えます。そうすることによって、まちに対する意識や関心が小さい頃からやることで、形成されていくのではないかと考えています。それが、ものに対する優しさとか、人に対する優しさという観察にまでつながっていけばいいと思えます。

日本は教育というと、すぐに小平市の勉強をしましょうと、人口が何人とか、駅が何、特産品が何という話になりますが、そういう教科書やノートを全部捨てて、できるだけまちを観察すると、それも楽しい。みんなでわいわい話しながらやると、いわゆる、まちづくり会議で経験したようなことを、小さいうちから経験させることで教育が成り立つのではないかと。

親というのは、教育に対する関心があるので、子どもが学校で景観教育をやっていけば、親も一緒にまちを見るようになるのではないかと。そういったことで、教育というのが取り入れられていけばいいなと思えます。

コーディネーター(市長):ありがとうございました。本当にその通りだと思います。

ただ実態としては、我が家に置き換えてみると、子どもが土日に電話すると、友だちは塾やサッカーに行っているんですね。

理屈はわかるけど、社会全体では塾やサッカーに行かせる。地域に子どもがいないんですね。日本のいろいろな制度というのは、地域と家庭がしっかりしていることを前提に社会の仕組み・構造ができています。ですから、そこをしっかりとるか、あるいはそれを前提とした社会づくりにするかなんですね。

外へ行けば、誰かに危害を加えられるから危ないと、友だちと2人で行けと言っても、友だちがいないのでひとりで行かなくてはいいけない。そういう現状をどうするかということがあると思います。

矢野:「優しさ」という話でしたが、二中で学校ボランティアというのにも携わっているのですが、子どもたちの助けをしようという人がたくさんいらっしゃいます。

いろんな学校で、ボランティアの方が関わっています。私は、小・中学校で学習支援ということで、放課後に、授業でわからないという子と一緒に勉強しているんです。

支援しようという気持ちのある方はたくさんいらっしゃる。ですから、みなさんでできることを少しずつしていけば大丈夫なのではないのかなと思います。

学校では、「総合」という科目があって、そこでもボランティアの人たちが活動している。福祉施設に小・中学生がボランティアに行ったり、農家の人に協力してもらい、作物と一緒に育てたり、そういうことができるのが、小平のまちだと思うのです。少なくなったとはいえ、農地もありますから、そういうことも活かせれば、本当にいいまちになるのではないかと思います。

コーディネーター(市長):3人の発言を聞いて、堀尾さん、何かありませんか。

堀尾:私もいろいろこういうシンポジウムに出させていただいて、司会もしたことがあるのですが、市長が司会をする姿というのは初めてみました。市長は非常にラフな格好でいられています。正直申し上げて、私が全国各地のシンポジウムに回るときには、防犯、防災、ごみ問題というような、大きな具体的なテーマがあります。それについてテーマを話すのですが、ある意味、「こだいらの将来を考える」というのは、非常にぜいたくなテーマですね。

小平に住んでいる方たちは、先ほど堀内さんが40人しか集まらなかったとおっしゃいましたが、もちろん気づかなかった人もいるでしょうが、それだけまちづくりに満足しているのか、現状でいいと思っている人も決して少なくないのではないのでしょうか。

例えば、矢野さんの、障がいを持った人たちに優しいまちづくりをしてほしいというのは、非常に大きなテーマだと思います。それは絶対に、これから我々も、どのまちもそうだと思いますが、そういうテーマが一つあると思います。今、将来に向けて、このまちがどうありたいのか。たとえば、ほかの市町村から、地域からたくさんの人に来てほしいのか、こういうことに困ったことがあるので、こういうことを解決していきたいという具体的なことがあるのかどうか。景観について聞きましたが、景観問題はどこの市町村でもある問題ですが、小平の景観を他の地域から見ると非常にきれいにみえる。

この間、トリノに行きました。トリノというのは古いまちです。200年、300年経っている重々しい建物の中にチャンネルがあり、その隣に八百屋さんがあります。また、ひとつの建物をいろんな業者が使っ

ていて、しかも整えられている。看板もほとんどない。コンビニやファストフードもほとんどありません。ものすごくきれいなまちなのです。それは、法令で決められているのです。

ただ、駐車はひどいです。違法駐車だらけで、街じゅうが駐車場です。だから、全然車が通れないところがたくさんある。それについては、イタリアの人たちは、車の町だからそれでいいと言う。外の人からみるとひどいのですが、中の人はそのでいいのだと言う。覚悟を決めているというのかな、他の人は何と言っても、住んでいる人間がいいというのだからそれでいいじゃないかと、何と言うか覚悟を決めた肝を持っている。そういうことが、これからは必要ではないかという気がします。

そういう意味では、未来を考えるとといった時に、どんなことをもとに、市民が話し合っていけばいいかというところのテーマ性をはっきりさせたほうがいいのではないのでしょうか。未来を考えるとシンポジウムをすること自体すばらしいと思うし、市長が司会をすることを含めて、小平は開けた行政だと感じます。他の自治体と比べて恵まれていると思いました。正直言って、「お困りごと」が「お困りごと」ように聞こえない、他のまちから見たらそれは贅沢なんじゃないかと言われかねないような、そんな気持ちがしてなりません。

ですから、もっと具体的に、たとえば、景観なら景観で、こういうまちづくりにしようという具体的なものを提示していただいて、住民の人たちは、なるほどねと気づかされて、その後の考えがすすむのではないかと思います。

コーディネーター(市長):テーマが大きすぎたこともあって、正直手探りしながらやっています。私も小平市は、大きな不満はないし、また、大きな満足もないと思うのです。

基地があるとか、大きな歓楽街があるとかだと、象徴的な課題がある。他市に誇れるものもある。そういう意味では小平市には、18万人が等しく課題として挙げられるものはない。また、18万人が全国的に誇れるものもない。玉川上水は誇れますが、通っているのは小平市だけではない。もちろん小平には一番原風景、原形に近い形で残っています。しかし、いろいろな課題はあります。

農地が残っていて、緑が多いといわれているが、少しずつ減っていることも事実ですし、まちづくりに関して景観が失われていって、欧米のまちにモデルを求めて、近代化するということは欧米化するということがあるのです。日本の建物の歴史とか街並みとかは、非常にすばらしいですが、排除されてきて無用なもののように扱われてきました。今になって気づいて、景観も大事なんだという議論が、いま小平市の中で多いのだろうと思います。

障がい者にとっても、住みやすいまち、生涯住み続けられるまち、地域の中で暮らせるまちにするためには、どうしたらいいのか。親が高齢化してきて、自分の老後のことも考えなければならない。今日、明日の問題ではないが、将来大きな問題になる。

そういう意味では、大きな満足はないけど、大きな不満もない。しかし、確実にいくつかの課題は市民とか地域とか、少し焦点を絞ってお話を広げていってもらえればと思います。

庄司:市長に反論するわけではありませんが、あくまでも小平の原風景が3点セットにあるとこだわ理由は、小平の生き様の動脈は、用水のおかげで今日を迎えているということです。水の都とまではいきませんが、いろいろ枝葉はあっても、そういうところに水を流して環境用水としての位置づけをきちんとする。小平のまちというのは、用水があつての生誕だということを、事実関係をもとに、

そういうところに力をそそぎながら風景をつくっていく。並木に緑を植栽するのも結構でしょうが、そのような意味で小平のまちを再生するというところに視点を向けながら、考えていくというのも一つの方法ではないかと思います。

それから、小平には、ほどほどの安住の地があるのではないかと思います。山がない、洪水もない、そういうことで災害というようなことがない。武蔵野原野のちょうど中央に位置している。玉川上水を考えると、左の方には荒川の方に注ぐ分水流的なところもありますし、南の方は多摩川の方に自然に流れる傾斜帯になっている。その一番真ん中にあるということが、地形的な位置づけで開拓されたのですから、そのへんのところを上手く利用している。小平には川もないし、水が湧くところもない。常時流れている川というのありません。石神井川というところの近くに、原始の人が住んでいた遺跡は出ましたが、今日に至ってそれを継承しているということもありませんので、そのへんのところをひとつの位置づけとして考えた、総合的な、広がりを持った小平というものを、もう一度原点に戻って見直してもいいのではないのでしょうか。

堀尾: 庄司さんにお尋ねしてもいいですか。玉川上水に長く関わっていらして、玉川上水は小平を貫いているものですよ。それに関する環境の保全に尽力されているということですが、障害になっているものというのは、具体的にはどんなことなのですか。

庄司: 昭和40年までは、今の都庁のある淀橋浄水場に都民の水として運んでいたわけですね。それ以後は、東村山浄水場の方にUターンをして、原水はそこでストップして、空堀になって、今日に至っているわけです。

玉川上水の原形は、ほとんど木がなかったということがひとつと、40年以降そのまま放置したために、必要以上に木が太くなり、これ以上繁茂すると、壁面の崩落もあり得る。また、台風が来ると痛々しい状況が発生するのではないかと思います。今度は史跡指定ということになりましたから、壁面や植栽の状況を今後何年間保存していくかという、計画の策定委員会というものができました。10年単位の見通しを、今の現況を評価しながら、対策を考えようということです。人工的に掘った川ですからいつかは滅びるのです、という方もいらっしゃいます。

今問題になっているのは、現状のままで玉川上水の文化的な遺産として保存していけるかということが最大の課題であると思っています。

堀尾: 意見が分かれるというところがあるのですね。

コーディネーター(市長): 玉川上水というのは緑地帯として、歴史的に価値があるということではなくて、堀割りの技術、つまり多摩地域の平坦な地形の中で、高低差をうまく利用した技術、その技術の水準が非常に高く、歴史的価値があるということなのです。

小平市民の多くは、意外と緑がいいと言う。それを求めて歩いて来る人もいます。木を切るということになると、その辺のところの問題になる。

堀尾: 行政としては、方向性がまだわからないのですか。

コーディネーター(市長):行政としては、まだ検討中です。

庄司:文化財指定したのは、国の文部科学省です。その下部のような機関として、東京都水道局があります。保存計画を8人のメンバーで検討するというので、来年の3月には指針をまとめるために、現在作業をすすめています。

堀尾:小平市として、このように保全してほしいという独自の提案はするわけですね。

コーディネーター(市長):その方向でやっていきたいと思っています。一時期、雑木の管理責任が曖昧だったときがあります。その間に、木がどんどん大きくなってしまって、法面が木の根っこなどで崩落している。だから、小金井や武蔵野、上流部分の立川などは、コンクリートで護岸を固めているんです。ただ、技法が歴史的に、価値があるので、コンクリートで固めると意味がない。そこらへんをどれだけ市民の方にご理解いただけるか、そのことが前提にないと進まないのです。木をいきなり切ったりすると、樹木に歴史的な価値があると思っておられる方が多いので、そのあたりが悩みの種です。庄司さんは玉川上水に長い間関わっておられるので、そのことも市民に知らせていくということも大切だと思います。守り、育て、活用していくことです。

活用の部分で、高橋都議会議員が質問なさったのですが、小金井桜という有名なものがある。そういうことを目指していくのか。あるいは、現状を受け入れるのかというところにあると思います。

堀尾:堀内さんのおっしゃっていた景観は、玉川上水の話ともリンクしてくる話ですね。

堀内:私は中学から大学まで小平だったのですが、その後あちこち行って、渋谷にも行きました。

こちらに引っ越して来て感じたのは、渋谷の方が、緑が多いイメージがあるのです。特に、中学時代には青梅街道なんかには大きな木があって涼しいという印象があったのですが、10年、20年経って戻ってくると、あの大きい木って確かこの辺にあったよなという感じで、ほとんどなくなっている。

以前は青梅街道に入ると「青梅街道に入った」という実感がありましたが、最近はないのです。この道も同じようになってしまった。保存樹というのが大きな木には書いてあったりします。保存樹と書いていながら私有財産の関係で、切られていく状況があるような状況なのです。

先ほど、景観の話をして、ここでも言いたいのですが、今まで都市計画は、国がつくって、市民はほとんど蚊帳の外というイメージがありました。この景観法が2004年の12月にできたのですが、これは画期的な法律のようです。ひとつは、景観に関する取組みを行政が主体的に取り組むことと、市民が行政と協働していくことを支援していく、法律的にそういう内容になっている。一番大きなのは、制度的な縦割り行政の欠陥をなくそうということで、いくつかの省庁が連携してつくったのです。ですから、それを受けて各自治体が景観の条例をつくるできるようになった。しかも、住民からも法案を提案することができるようになった。それは、法律的に認められて、推奨されている。玉川上水の価値とその上の緑だとか、堀尾さんがおっしゃったように、そういったことをこれから小平市はどうしたいのだ、住民はどうしたいのだ、我々がどうしたいのだということ打ち出していけば、

景観法に基づいて、いろいろなことができる。

青梅街道の樹木が個人の敷地に入っているの、いろいろな問題で、なんだかんだ言って切られてしまう。それなんかも、景観法では固定資産税や相続税まで踏み込んで、書かれているようなのです。それを活かすというか、行政としてもまち全体をつくっていくシステムというか、組織とか、そういうものをつくっていくことによって、小平グリーン・ロードなども小平の総合的な売込みにしようということであれば、そうした条例をつくることができる。

花小金井から小平までの狭山・境緑道というのを歩いたときに、緑は結構多いのですが、こういうところにちょっとおしゃれなお店などがあったりすれば、経済的な活性化になるのではないかと思います。話も話し合ってきているのです。

ですから、先ほど堀尾さんがおっしゃったように、このテーマはいったい何なんだ、小平市はどうしたいんだ、我々市民は何を望んでいるのかということを確認にすれば、最近の法律はそれを受け入れるというか、推奨する法改正ができています。だから、ホームページで、景観法とか、地方分権一括法とかを開いてみると、昔と違って国と自治体の関係が変わってきている。昔は、国がお上としてあって、自治体が代官のように上下関係がありました。ホームページを読んだ限りでは、すべてではないが、国と自治体が対等な協力関係にある。そうすると、自治体で自分ではあることを考えて、自己決定権を持つようになる。そうすると、市民の力を借りるというか、それがないと自治体そのものがやっていけなくなるようなことになるのではないのでしょうか。そういう意味でも、自治体にしても市民の意識を高めて、自分のまちに力を貸してくれるような、そういった活動をどんどん活性化させていかないと、自治体もこれからは大変だと、そういう印象を持っています。

堀尾:八王子の自宅の近くに、24時間レンタルビデオショップできました。24時間営業になると、風紀が悪くなるということで、夜は12時から1時に閉めて、また朝改めて8時から9時から再開してほしいということで、住民運動を起こしました。結論からいうとそれはだめで、企業の自由ということで、会社に押し切られて24時間営業になってしまったのです。

また、番組でもやったのですが、マンションができることによってまちの景観が損なわれるということで、住民運動が起こったのですが、法律に抵触していない限り、やはりそれは業者の自由だろうということです。住民はとにかくやめてほしいということで、陳情しながら話し合いましたが、6階建てが5階建てになったくらいで、「妥協の産物」で来てしまったという例があります。

だから、景観法のこともおっしゃっていましたが、その地域でどういう風に計画的に景観を守っていくかということ行政が中心になってやっていかないと、資本主義の日本の中で、自由にいろいろなことができるということがあるのです。その自由さと、企業の論理と、住民と、行政の方針、そのあたりのバランスがすごく難しいと思うのですが、やはりその景観を重点的に考えるまちづくりをすすめていくのであれば、先んじて「ここには高さはこれくらいものしか建てられません」とか、自治体独自の網の目を先にかぶせていく必要があるのではないのでしょうか。

これは、自治体の長としてはいかがでしょうか。

コーディネーター(市長):堀内さんが先ほど言われたように、地方分権一括法が成立して、国と地方が対等な関係になってきて、それは喜ぶべき部分と、いろいろな権限がきたために大変な部

分もある。

国が言ったのだから・・・と他人のせいにして、市民に負担をお願いする時は割といいわけです。まちづくりの場合、規制があるので、規制によって被害を受けるというわけです。資産管理をするわけですから、青梅街道についてかつて都議会で質問したこともあります。青梅街道の住民たちをどう守っていくのかと、青梅街道に面している人たちは、風致地区として建物制限に掛かっている。それを撤廃してほしいと。一般市民からは守ってくれと言ってくる一方、対象となる人たちからは青梅街道は高度利用したいという要望があったりする。現状では、かつてのような青梅街道の樹木保護は難しいという意見もあり、選挙を通じていろいろな方から言われました。

そのあたりは、一方的ではなく、逆の立場の人々も巻き込んで考えないといけない。樹林地を持っておられるとか、青梅海街道に面して生活している、大きなケヤキ並木をもっている、枝や葉っぱが落ちて、そのことで苦勞をしている人もいます。そういう人々を巻き込んでもらって「市民会議提言」を出してもらおうとよいと思います。利害調整も含めて、精力的にそういう提言をしてほしい。行政が一方的にやるということもできますが、そういう時代ではないというのが、国の大きな流れだし、市民のみなさんもそうだと思います。ただ、どれだけの人を巻き込むか、それを調整してほしい。

堀尾: 極端な例だと、京都はまち全部が風致地区です。なぜなら、古都を守ろうという住民意識と、観光客の人たちをたくさん呼ぼうという目的意識があって、網の目をかぶせている。例えば、マクドナルドのマークは普通黄色ですが、オレンジになっていたりするのです。そういう形で企業にも変えてもらったりしている。

先ほど話したような、自治体としての方針を住民が住民意識として、どのようにカバーしていくのか。利害関係もあって難しいとは思いますが、景観問題はそういう意味では難しいと思います。多くの人たちを巻き込んでいかないといけないことだと思います。

堀内: 北京でホテルを建てる仕事がありました。日本で自分たちが設計してデザインしたものというのは、そのまま建ちます。北京でやった時には、芸術審査会というものがあって、どうして、このまちで、この高さや、このデザインなんだということを審査されるのです。その時はデザインを審査されて驚きましたが、その後諸外国はどこでもそうだとことを知りました。自分たちのまちをきちんとするために、こういうふうにしよというものが、結構諸外国にはあることを学びました。



コーディネーター(市長):スタンフォードに行ったときに、200年前の建物を見ました。内装は変えてありますが、外観は絶対に変えられない、ものすごい規制なのです。ある意味、公権力でまちづくりをしているのです。日本の場合は、土地基本法ができて初めて、土地に対する一定の公的な関与ができるようになった。今までは土地を持っている人の自由裁量というものがあったのですが、土地は地球の表面だから非常に公的なものである。日本もそろそろある程度公的な権力でやらなければならない。ただ、ある程度は市民合意によって積み上げていく必要もあります。

矢野さんに伺います。グループホームなど、場所によっては障がい者施設を拒否される、地域で受け入れられないという反対運動があったりしていますが、小平市ではそういう話を聞いたことはありません。障がいがある方が地域で暮らしていくためには、障がいがある方への理解が重要だと思いますが、障がい者団体としてどうでしょうか。

矢野:小平は早くから作業所があったので、グループホームを建てるにしても、作業所をつくるにしても、周りの反対はあまり大きくはないですが、少しは聞こえてくることもあります。ただグループホームというのは、特別な家ではないので、ほんとに普通の家にたまたま障がいのある人が、ひとりで暮らすのは不安だからということで、何名かで暮らすということです。

今日の午後、社会福祉協会のボランティアセンターと一緒に知的障がい者支援ボランティア講座というのを開きました。今日が最終日だったのですが、来てくれた方は障がい者の方と接して、「何も特別なことはないのです。何の知識もいらないければ、ただ寄り添うだけで一緒に何かを話しましょうという姿勢が大切なのです。」ということを感じてくださるのです。だから、ほんとに知っていただくこと、特に知的障がいの方は、その障がいの程度もほんとに幅が広いので、いろいろな人がいるのを知っていただきたい。グループホームで生活しているときも、同じ立場で住民として受け入れていただき、挨拶をし、町内で掃除があるなら一緒にし、町内会でお花見があるなら一緒にし、そういう形で暮らしていければいいと思います。ただそれには、住民の方たちがしていただくことなので、住民の方たちが自然とそういう気持ちになっていくということに、市の力というのはとても重要であり、市でも考えていっていただきたいと思います。

堀尾:他の自治体、障がい者問題に取り組んでいる自治体、ご自身が活動されていて、あの地域のあんなところが羨ましいとか、また、小平はこういうところが充実しているなというところも含めて、他のところと比較し、小平は障がい者に優しいかどうか度合いを聞かせてもらえますか。不満があるならば聞かせてほしいです。

矢野:小平養護学校という、肢体不自由の学校があるので、駅にエレベーターがついたのも早かった。知的や精神に関しても、力を入れている法人がありまして、進んでいるほうだとは思いますが。

ただ、先ほど小平市には特徴がないと言ったとおり、福祉についても同じなのです。何でも中くらいなのですね。予算のかけ方にしても中くらいだし、それぞれの人たちに移動介護の時間を1月いくらという額も、多摩の一番上と下を足して割ると小平になるという、そういうところですよ。

堀尾:下よりはいいけれど、もっと上をめざしてほしいということですね。

矢野: そうです、もっと上を目指してほしい。

堀尾: 文字通り「小平」になっているということですね。

高齢者の認知症の方たちのグループホームという、すごく増えていますね。人が一緒に住むということが、いろいろな意味で増えていくのではないかと。そういう意味では、家というものを行政が優しく見守って、たくさんつくってほしい。そして、それをケアする人もたくさん供給してほしいと思います。 どうなのでしょう、市長さん。

コーディネーター(市長): 中くらいが多いというのはよく言われます。目標にしているわけではありませんが、そういう要求水準をある程度数字にするとそうなっています。小平は非常にボランティア、特に学校を中心としたボランティア制度がすごい。学校を中心にしたコミュニティが非常に充実してきている。

そういう意味で、市民のみなさんが担っている部分が、いま子どもの安全性が脅かされていることについても、地域の底力をどう行政の中に生かすのか。

新しい公共、昔はここから公共、ここから民間と、はっきり分かれていました。学校なども、元々は公的なものですが、民間からどんどん新しいものができています。新しい保育制度も民間ベースですすんでいることもあります。ただ、それは民間だけではなく、法的規制が必要なのです。そこは、民間と市民と中間的な NPO などが、これからどう制度的につくっていくかが問題です。特に福祉の領域では、施設中心に行政がすすめてきましたが、今は NPO や民間団体、ボランティアがこの部分を担っています。どう協働してすすめていくのか、そういうところが課題です。

市は、市民の力をできるだけ支えるという意識を育むために、タウンミーティングをやったり、審議会などに市民の人を公募して入ってもらったりして、支える市民層をつくっていく必要があります。

矢野: 福祉分野、環境分野、教育、男女共同参画、いろんなところでたくさんの方が活躍しているのが小平市。その人たちの力をどうやって結び付けていくかがキーワードになっていくと思います。

堀尾: 行政には給食当番の論理があります。例えば、カレーライスには文句が出ないように公平にかける。配るときにはすっかり冷めて、まずくなっている。それが行政だと思います。

でも、行政はあくまで公平が論理だから、税金をあまねく使わなくてはならない。じゃあ、どうするかというと、積極的に住民が声を出せば、そこに目を向けて、予算と力を貸してくれるのが行政の姿。逆にそうしなければ、行政もどうしていいかわからない。それからすると、福祉、景観、ボランティアの育成も盛んだと考えると、声の大きいところや目立った活動をしているということは、行政を動かすファクトになりますか、市長さんどう思われますか。

コーディネーター(市長): ある面ではそうした状況も生まれてきている。

ひとつとしては、団塊の世代が地域に戻ってきますが、技術的ノウハウとか経験など、ものすごく能力をもっている。役所も政策形成能力がありますが、現場が大事。その地域に住んでいて、生活していて息遣いを捉えてくる時代です。インフラはほとんど終わっています。学校、集会所、道路も

ほとんどできている、それをどういかしていくか。市民の政策形成、市民の人がこうしたいという要望に対して、市は限界があるので、市民に求めざるを得ない。

今回の予算の中に 150 万円、市民のみなさんの公募に予算をつけました。審査はありますが、公的な貢献事業に対して、市が補助を出し、市民の要求・要望を予算化しました。これは画期的なことだと思っています。ある意味では、市の限界は市民に補ってもらわないといけないという事業なのです。

堀尾:そういう意味では、矢野さんが声をもっと大きくして、行政から、「また来たよ、矢野さん」みたいに、パイプをつくって行って、それが大きな力になって自治体を動かしていくということですね。

こういうシンポジウムに参加して、これに賛同された方々が声をどう大きくしていくかではないでしょうか。

コーディネーター(市長):今までは要求・要望型が大きかった。そこから一歩進んで、堀内さんの提言書のように、行政を支えるのだという具体的な対案を示して、それにかかる費用や人的な配置も含めて、実現不可能な、理想論ではなく役所の限界を知ってもらった上で、市でも門戸を開いてやっていく。

実現可能な対案をどんどん出して行ってほしい。場合によっては、事業を決定していく場に、みなさまも入っていただきたい。

堀尾:こんなことまでやっている自治体や住民グループもいるんです。行政に迫った時に、そんなことはうちではできないし、全国でもやっているところありませんよと言った時に、「ご近所の底力」でやっていたよといえば、動くところも結構ある。

船橋のある住民が、ごみの収集を朝出すことになっているのはおかしい、いつ出してもいいんじゃないかという運動をして、夜 12 時までに出していいことになった地域があります。カラスは昼間しか行動しないので、カラスにも荒らされないリーズナブルな施策なのですね。そういうこともいろいろ研究して、行政に迫ったところ、その地域ではそうになりました。

ただ、その地域でも「ごみは朝でしょ」という人もいた。そういう人たちの話し合いで、その後 24 時間いつでも出せるようにしました。いつでも出せるということは、管理しなくてはならないから、住民が輪番制で当番にして、住民にも管理する責任をもってもらえるような体制をつくりました。そういう事例を出したら、「ごみを夜出せるようにしてくれ」という要望が全国でたくさん出るようになりました。

妙案の例を探して、提示するのは大切なことではないかと思います。情報収集力がこれからの住民には必要です。

矢野:行政はそういうのを嫌がるのです。「隣の市ではやってます」とか、「多摩のどどこ市がやっている」というのはすごく嫌がるのです。

堀尾:嫌なものなのですか。

コーディネーター(市長):前例に捕らわれずにやろうとしていますが、ただすべて新しいものに取りかかるということもできない。小平市ではありません。

役所というのは公平・公正でなくてはならない。どこかで公平・公正を担保するために、条例とか、規則をつくる。そういうバックボーンがないとできないという仕組みがある。最終的な責任をどうとるのかということがある。いまは特にいろんな事故などもある。矢野さんのおっしゃっていたのは法的な整備の問題と予算の問題だと思います。

1日2、3通「市長への手紙」が来ますが、本当に胸を打たれるものがあります。ただ、この人がかわいそうだからといった時に、情だけでできないことがたくさんあります。規制がある。規制というのは、公平にするためにあるルール。もちろん、ルールを時代に合わせる必要もあります。

小平市はそんなにかたくなではありません。

堀尾:行政は生きた人間の集まりですから、ここをバリアフリーにしようといえれば公的機関であれば、行政の胸先で決まります。

矢野:小平市がやってくれたこと発表させていただきます。作業所の自主製品を、「小平の産業」のケースの横に置かせてくれと頼んだところ、なかなか置かせてくれなかったのですが、私たちがケースのお金も出すから場所だけ貸してほしいといったら、市長が替わったこともあり、市が用意してくれました。その製品をみなさんに知っていただきたいので、チラシも作り、そういうこともお願いしたら、障害者福祉課がそれを宣伝に行ってくれるようになりました。

こちら側がある程度お金を出してやるというと、動いてくれます。

堀尾:お金はどうされましたか。

矢野:動けば、最終的にお金は出してくれました。ケースもいいものを買ってもらいました。でも管理は自分たちでやっています。

堀尾:いろんな要望があった中で、どの要望を行政が採用していくのか、それが小平市の未来を考える上で重要なポイントだと思うんですね。どこに重点的にお金を使っていくのか。

住民が本当に必要だと思っていることを、市議会や市長も含めて考えていくという作業になるのでしょうか。

コーディネーター(市長):そうです。

堀尾:ということは、いかに住民が主体的に動いていくかがポイントになるわけですね。

コーディネーター(市長):そうですね。

どう行政に市民が関わってくるのか、従来の要求・要望は、それはそれとして、はっきり分けられな

い領域をお互いどれだけ協働して、埋められないところをどうやって埋めていくか。

予算については、一定の限界があるので、新しい事業を始めるときは、どこか古い事業をやめなくてはならない。そうすると、いろんな人が関わっていて思いもある。役割の終わった事業もある。新しいことをやるときは、古い事業のどこかを見直さなくてはならない。そこには多くの市民が関わっているの、そこを説得する必要がある。新しいことをやることには、そんなに反対はありませんが、古い事業をやめるときに、その理解を得るのが大変なのです。

堀尾:それを考えると、これからは行政や税金に頼らない発想のもとに、その延長に、あんな活動しているなら市も少し援助しようかと仕向けるように、これからの住民側の姿勢が必要ですかね。

堀内:市民会議に 18 万人に対し 40 人の参加でした。後で考えると、いままでずっと市民活動をしている方は、自分たちの活動が土日にあたりして参加できないというのがあるんですよ。

さっき矢野さんが小平市はいろんなところでいろんな人が活動していると言うのを聞いたとき、また 18 万に対し 40 人ということ考えたときに、みなさんにお聞きしたのですが、小平というのは市民の意識はどのなのでしょう。

コーディネーター(市長):タウンミーティングを 17 カ所回っていますが、その地域に課題があると人は集まります。これをどう見るといいの。人数が少ないのがまずいと捉えるのか、いいと捉えるべきか。多いかどうかは問題ではないと私は思います。市民意識は非常に高いと思う。何か生活にかかわる問題があれば敏感に反応しています。



堀尾:せっかくですから、みなさんにどちらかに拍手してほしい。小平市民は住民意識が他の地域に比べて高いか、そうではないか。

このぐらいの割合ですか。小平市民全体の拍手として、これも中くらいですかね。

小平は住みいいと思いますが、小平というブランドもあるのでは。もっと誇りを持って過ごしていただければいいと思います。

コーディネーター(市長):途中から堀尾さんにコーディネーターやっていただきました。

全体の流れでいうと、市民のパワーをどう行政との関係に生かしていくのか。また、市民の要求・要望を、行政の中でどう形に変えていくのか。あるいは協働してどうすすめていくのか。キーワードは「市民」ということになるかと思っています。

こういった声を大切にしながら 21 世紀構想を、平成 18 年から平成 32 年までの 15 年間を見越して、今回構想をつくったわけです。まもなく製本されて、有料ですが、配布ができるようになります。読んでいただき、そして支えていただければと思います。

これで、本日のシンポジウムを終了させていただきたいと思います。

堀尾さん、本当にありがとうございました。会場のみなさん、パネラーのみなさんに拍手を送って

いただければと思います。

本日は長時間にわたりありがとうございます。

司会:長時間にわたりありがとうございました。ステージのみなさんにもう一度盛大な拍手をお願いします。

これもちましてシンポジウムを終了させていただきます。

みなさんありがとうございました。

(了)

資料編

資料 1	シンポジウムの記録
資料 2	プログラム
資料 3	ポスター・チラシ
資料 4	アンケート集計結果

資料 1 シンポジウムの記録

- 1 日 時：平成18年(2006年)3月18日(土)(小雨のち曇り)
午後6時45分～9時30分(6時30分開場)
- 2 会 場：ルネこだいら(中ホール)
- 3 主 催：小平市
- 4 基本テーマ：15年後の『小平』の未来を考える
- 5 参加者： 約190名
- 6 出演者：
 - (1) 基調講演 (6時50分～7時30分) (40分間)
講師 堀尾正明氏(NHKアナウンサー・キャスター)
演題 まちの活力・魅力を考える
今「ご近所の底力」のパワーがまちを変える？
 - (2) パネル・ディスカッション(7時40分～9時25分) (105分間)

ゲスト・パネラー 堀尾 正明氏(NHKアナウンサー・キャスター)
パネラー 庄司 徳治氏(小平市玉川上水を守る会世話人)
パネラー 堀内 通成氏((元「ワークショップ
『小平市まちづくり会議』代表」)
パネラー 矢野 久子氏(小平手をつなぐ親の会会長)
コーディネーター 小林 正則(小平市長)

テーマ 15年後の「こだいら」の未来を考える
みんなのパワーで まちを進化させるには

15年後の「こだいら」の未来を考える

新しい「こだいら21世紀構想」へ

みんなのパワーで まちを進化させるには

平成 18 年(2006 年)3 月 18 日(土)

午後 6 時 45 分 ~

午後 6 時 30 分開場

会場 ルネこだいら 中ホール

小平市

本日のテーマ

15年後の「こだいら」の未来を考える



ごあいさつ

本日は、お忙しいところ、本シンポジウムにご参加いただき、ありがとうございます。

さて、小平市は、21世紀に入った現在、新しく平成18年度(2006年度)から15年間にわたるまちづくりを開始いたします。かつては、こだいらは江戸時代より新田開発の地として、そして戦後は大都市近郊都市として主にベッドタウンとしてその役割を担いながら、緑と都市機能が調和した豊かな住宅都市として発展してきました。

ここで、平成18年度より第三次の新しいまちづくりの構想として、「こだいら21世紀構想」がスタートすることになりますが、私たちは、今までにない不透明な時代の中で生きているといわざるを得ません。すなわち、日本経済や地方自治の制度は大きな岐路をむかえ、また小平市を取り巻く財政環境についても、従来とは比較にならないほど厳しくなっています。そして、今後の分権型社会の進展は、私たちに、今まで以上に「自己決定」「自己責任」が求められることとなります。

この新しい「こだいら21世紀構想」では、新たな将来都市像を、「躍動をかたちに進化するまち こだいら」とし、さらに、この将来都市像、すなわち「進化するまち」を実現するために、私たち市民一人ひとりの持つ地域における「地域力」、こだいらの地域の経済や社会システムとして「民活力」、そして市全体を調整しまとめる「行政力」の3つの力が必要であるとしています。そして、この「地域力」「民活力」「行政力」の3つの力がバランス良く育つことによって「元気なまち」が実現することとしておりますが、そのためには、今まで以上に市民や行政が一体となり知恵を出し創意工夫をしていくことが求められています。

今回は、この新しい年次がスタートするにあたり、テレビ等でご活躍のNHKアナウンサーであり、またキャスターでもあります堀尾正明氏をお招きし、魅力ある地域社会の魅力あるパワーの事例をもとにしてスケールの大きい基調講演をお願いしました。

さらに、堀尾氏をゲストパネラーに加え、現在、各方面で多彩な活動を展開されておられる庄司徳治氏、堀内通成氏、矢野久子氏の3名をパネラーにお迎えして、近未来である「15年後のわが小平市の将来について」大いに論じていただく趣向でございます。

ここで出されました論点が、皆様のこれからのまちづくりのヒントとして大いにお役に立てれば、と期待するものでございます。

それでは、本日は、リラックスして大いにお楽しみください。

平成18年(2006年)3月18日

小平市長 小林正則

本日のプログラム

開 会

1 基調講演 (18 : 50 ~ 19 : 30)

演 題 まちの活力・まちの魅力を考える
今「ご近所の底力」のパワーがまちを変える？

講演者 堀尾正明 氏 (NHKアナウンサー・キャスター)

休 憩 (19 : 30 ~ 19 : 40) (10分間)

2 パネル・ディスカッション (19 : 40 ~ 21 : 25)

テーマ 15年後の「こだいら」の未来を考える
みんなのパワーで まちを進化させるには

ゲスト パネラー 堀尾正明 氏 (NHKアナウンサー・キャスター)

パネラー 庄司徳治 氏 (小平市玉川上水を守る会世話人)

パネラー 堀内通成 氏 (元ワークショップ「小平市まちづくり会議」代表)

パネラー 矢野久子 氏 (小平手をつなぐ親の会会長)

コーディネーター 小林正則 (小平市長)

閉 会

基調講演・ゲストパネラー

(敬称略)



堀尾 正明 (NHK アナウンサー・キャスター)

昭和 30 年 4 月、岡山生まれ。早稲田大学第一文学部哲学科卒。北九州放送局(4年)、福岡放送局(4年)、大阪放送局(4年)を経て、現在、東京の放送センター・アナウンス室 6 年目。「ニュース 10」キャスターをはじめ、スタジオパークからこんにちは」司会、紅白歌合戦の実況担当など、幅広く活躍中。「もっともNHKらしくないアナ」といわれ、トリノからのオリンピック報告は記憶に新しい。

パネル・ディスカッション

(敬称略：五十音順)



庄司 徳治 (小平市玉川上水を守る会世話人)

昭和 4 年生まれ。東京都みどりの推進員をはじめ、小平市では緑の基本計画原案検討委員会の委員、緑化推進委員、環境審議会委員をつとめる。ながく玉川上水の保全に関わり、実践を通じた専門的な造詣の深さは注目に値する一人。(上水新町在住)



堀内 通成 (元ワークショップ「小平市まちづくり会議」代表)

昭和 25 年目黒区生まれ。小平 1 中から現在まで計 21 年間ほど小平在住。武蔵工業大学建築学科卒。大手建設会社の設計部に所属し現在に至る。04 年から 9 ヶ月間、小平市のワークショップ「小平市まちづくり会議」に参加し、リーダーをつとめ、その真摯な態度はリーダーの信頼を集めた。(仲町在住)



矢野 久子 (小平手をつなぐ親の会会長)

昭和 30 年生まれ。3 人の子育てをしながら、仕事として小中学生向けの教材作成を続ける。福祉分野に限らず、PTA 活動、消費者問題講座など、教育、消費者問題にも関心を持つ。現在は、学校支援ボランティアに参加。真面目な取り組みと面倒見の良さに定評がある。(小川東町在住)

コーディネーター 小林正則 (小平市長)



こだいら 21世紀構想 小平市第三次長期総合計画 基本構想

〔平成 17 年（2005 年）9 月 30 日 議決〕

基本理念

みんなが「いい表情（かお）を持つ」こと
この地が「いい郷（さと）であり続ける」こと
そして「いい明日（あした）を予感させる」こと

将来都市像

躍動をかたちに 進化するまち こだいら
緑と住みやすさを大切に さらに自立し活力あるまちの実現をめざします

5 つの将来都市像

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 安全・安心で、いきいきとしたまち | 地域・安全・生活・文化 |
| 2 快適で、ほんわかとするまち | 緑・水・環境 |
| 3 健康で、はつらつとしたまち | 次世代育成・健康福祉・教育・生涯学習 |
| 4 住みやすく、希望のあるまち | 都市基盤・交通・産業 |
| 5 健全で、進化するまち | 地方自治・行財政 |

目標年次

平成 32 年度（2020 年度）（15 年後）

将来の人口

19 万 2,000 人

基本構想を実現するために

3 つの力

地 域 力

民 活 力

行 政 力

事務局：小平市都市経営部（計画調整）187 8701 小平市小川町 2 丁目 1,333 番地
電話 042（341）1211（代表）
ファックス 042（346）9513 / tkb-keikaku@city.kodaira.lg.jp

シンポジウム 15年後の 「こだいら」の未来を考える

入場無料



平成18年(2006年)3月18日(土)

ルネこだいら 中ホール

開場18:30 / 開演18:45 基調講演(18:50~19:30)

基調講演(18:50~19:30)

講演者：堀尾 正明 氏

演 題：まちの活力・まちの魅力を考える
～今「ご近所の底力」のパワーがまちを変える?～

パネル・ディスカッション(19:40~21:25)

テーマ：15年後の「こだいら」の未来を考える
～みんなのパワーで まちを進化させるには～



基調講演者・ゲストパネラー
(NHK アナウンサー)
堀尾 正明 氏



小平市立民生センター 代表
荻原 健治 氏



スワーフクラブ
(小平市まちづくり協議会) 代表
黒井内 直成 氏



小平市まつり館の会 代表
矢野 久子 氏



コーディネーター
小平市会
小林 正則 氏

※お申し込み・変更あり(お振替も希望する場合は、事前に訂金調整に連絡をお願いします。先着1名(1歳から就学前まで))
ルネこだいらには来場者用の駐車場がありませんので、車での来場はご遠慮ください。

●問合せ先:小平市都市経営部計画調整 042-346-9582



資料 4 アンケート集計結果

シンポジウム 15年後の「こだいら」の未来を考える アンケート集計結果

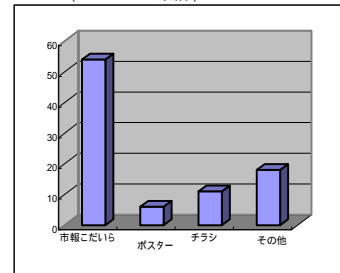
平成18年3月18日(土)ルネこだいら:
(18・3・22集計)

1. この「シンポジウム」について、どこでお知りになりましたか？

市報こだいら	54	
ポスター	6	89
チラシ	11	
その他	18	

(その他の内訳)

- 農業委員
- 会議
- 知人より(3)
- 市民提言書の方から ()内記載なし
- 小平市HP(2)
- 議員さんから
- 自治会会合
- 職場での案内
- 母から
- 活動団体から
- パネラーから
- 友人(2)
- 友人からチラシの手渡し



<備考> 複数回答あり

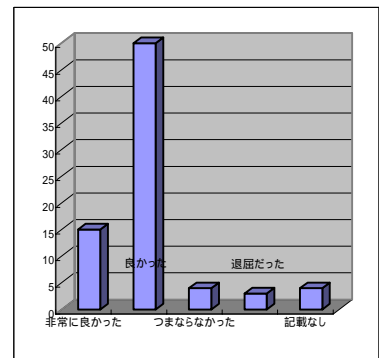
については、「見なかった。」という記載あり

2. このシンポジウム全体の内容や構成はいかがでしたか？

非常に良かった	15	
良かった	50	
つまらなかった	4	76
退屈だった	3	
記載なし	4	

<備考> 複数回答あり

- 良かった・・・(地域力)減少(市内・津田町 / 82歳 / 男性)
- 良かった・・・東村山からみたら小平市は文化的でうらやましい(東村山市 / 50代 / 女性)
- 良かった・・・但し継続することが大切(市内・学園東 / 64歳 / 男性)
- 記載なし・・・後半は時間のムダであった(小川町1丁目 / 60代 / 男性)
- 記載なし・・・ と 言葉の意味おなじような気がするのですが・・・(市内・花小金井 / 30代 / 女性)

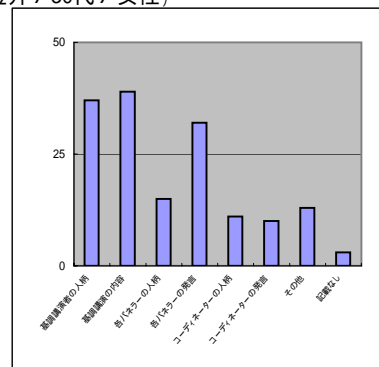


3. 特に印象に残ったところは？(複数回答OKです)

基調講演者の人柄	37	
基調講演の内容	39	
各パネラーの人柄	15	
各パネラーの発言	32	160
コーディネーターの人柄	11	
コーディネーターの発言	10	
その他	13	
記載なし	3	

(その他の内訳)

- 堀尾氏の意見が良かった。外からの目。庄司氏のように歴史を知っている(市内)
- 堀尾アナウンサーの発言理念が素晴らしかった(市内・津田 / 82歳 / 男性)
- それぞれの方がとりくんでののに関心しました(東村山市 / 50代 / 女性)
- 堀尾さんの小さいときからが大事という話(景観)(多摩地区 / 50代 / 女性)
- シンポ“テーマ” & 堀尾氏のつっこみがいい味であった事(市内・学園東 / 50代 / 男性)
- コーディネーターの方ももう少し色々勉強してほしいと思った(市内 / 67歳 / 女性)
- 15年後の未来は何も見えない(市内・仲町 / 60代 / 男性)
- 市の特徴を生かす(新旧共により点が生きる様にするにはよい)(市内 / 女性)
- 知的障害者に対するボランティア(市内 / 男性)
- 個々の話を紹介する第一段階とすればよい(市内・学園東 / 64歳 / 男性)



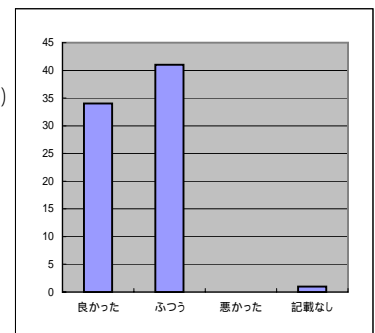
- ・ バネラーの選考が良くない(市内・花小金井 / 74歳 / 女性)
- ・ コーディネーターの苦しみ、行政全体の苦しみがにじみ出たと感じた(市内・喜平 / 60歳 / 女性)
- ・ まあまあでした(市内 / 70歳)

<備考> 複数回答あり

コーディネーターの発言・・・最後によやく(多摩地区 / 50代 / 女性)

内容等で印象に残った部分で、具体的なところがあればご記入ください。

- ・ かたよった政治力が強い(市内)
- ・ やさしさを感じられる町づくり(小川東 / 50代 / 男性)
- ・ 都市計画道路3・3・8号線とこだいらの未来(市内・津田 / 82歳 / 男性)
- ・ 小平の歴史を考えたまちづくり(市内・花小金井 / 30代 / 女性)
- ・ テーマがスムーズに話し合えたのは堀尾さんのまとめ役もあったかな?(東村山市 / 50代 / 女性)
- ・ 外国では自分達の街を守る為に住民も自治体もかなりの努力をしているという話。日本でも是非そうなってほしい。メチャクチャな再開発で景観がこわれた所がたくさんありますね。(東村山市萩山町 / 60代 / 女性)
- ・ 堀江さんへ 昨年、スズメバチで悩んだとき、番組ホームページをみて解決策を発見！ほっとした思いをしたことをお伝えしたくなりました。(多摩地区 / 50代 / 女性)
- ・ 緑が減って行く事に危機を感じているので行政のかかわり方、つっこんだテーマで話してほしい(市内・上水南 / 60代 / 女性)
- ・ 小平の歴史は形成(遺産)を大切にしようという発言(市内・津田 / 50代 / 男性)
- ・ ご近所の底力発想・景観教育・堀尾氏のつっ込み(市内・学園東 / 50代 / 男性)
- ・ 小平市に不満がないことを印象づけてしまった(市内・津田 / 63歳)
- ・ 上水の緑は草花も入るが抜かれて持っていける(市内 / 67歳 / 女性)
- ・ きちんとしたビジョンを持つことが大事であるという方向性についての話(多摩地区 / 50代 / 女性)
- ・ シンポジウムの目的とまとめをしっかりと話してほしい(少しマイナスです)(市内・花小金井 / 50代 / 男性)
- ・ 住民パワーの出し方 NHK近所の底力の出し方(市内 / 70代)
- ・ 市民参加の行政の前提には、具体的な対案が必要との市長の発言は、そのとおりだと思います(市内・津田 / 60代 / 男性)
- ・ ご近所のそこ力(市内・津田 / 50代 / 女性)
- ・ まちを知るためのまちあるき。防犯・防災だけではなくまちを知る。ウォークラリーのようなまちあるきを土日で一般の人や児童の学習の時間でできたらおもしろい。グリーンロードの土日の出店もおもしろい。市民活動者をつなげる役割の必要性。景観を守る条例を作る(市内・天神 / 40代 / 女性)
- ・ 具体的なテーマへの絞り方。玉川上水、市民の参加、障がい、青梅街道のあり方(市内・たかの台 / 50代 / 男性)
- ・ 堀尾さんをコーディネーターにした方が良かった(市内・学園東 / 40代 / 女性)
- ・ シンポジウムの題目が大きき話の内容がまとまりにくい感じだった(市内・学園西 / 40代 / 女性)
- ・ 堀尾氏が行政の壁を破ることと云っているのに、市長は市には市の行政の蓄えがと・・・計画書ありきの思想につながる(市内・津田 / 73歳 / 男性)
- ・ ご近所の底力のヤキナオシ的内容だ(市内・花小金井 / 74歳 / 女性)
- ・ 小平市の源について理解でき良かった(市内・津田 / 60代 / 女性)
- ・ テーマが大きすぎる(市内・たかの台 / 60代 / 女性)
- ・ 基調講演で「自治会」よりも「テーマごとのグループで取り組むことが大事」との主張(市内・小川町一丁目 / 60歳 / 男性)
- ・ 堀尾氏が途中で言われた様に、テーマが大きすぎたと思う(市内・美園 / 60代 / 女性)
- ・ 資源開発があるかないかの問題点(市内 / 70代)
- ・ 具体的な市民要望は何か、掘り下げたらどうかという提案はよかった(市内・小川 / 60代 / 女性)



4. このシンポジウムの受付・案内等について

4 - 1 市職員の対応や言葉づかいについて

良かった	34
ふつう	41
悪かった	0
記載なし	1

4 - 2 特に、対応等でお気付きの具体的な点がございましたら、ご記入ください。

- ・ 閉館が6時30分であるが、早くきている人は、先にホールの中に入れる事を考えてほしい。お役所の仕事である(市内)
- ・ 満員になると思い、早く来すぎました。もったいないですね(東村山市 / 50代 / 女性)
- ・ 皆さん感じよかったです(東村山市・萩山町 / 60代 / 女性)
- ・ 良い(市内・美園 / 40代 / 女性)
- ・ 市長さんの話がわかりにくかった(市内・学園東 / 16歳 / 男性)
- ・ 堀尾さんのお話をもっとききたかった！でも夜でしたので仕事を終えてからきくことができよかったです(多摩地区 / 50代 / 女性)
- ・ 堀尾さんの色々な見方が市内の人とのちがいがよい(市内 / 67歳 / 女性)
- ・ 笑顔であいさつをされたのははじめてのような気がしました。良いことですね(市内・天神 / 40歳 / 女性)
- ・ 資料が少ない(多摩地区 / 50代 / 男性)
- ・ 会場30分前にしてほしい(市内・たかの台 / 60代 / 女性)
- ・ 堀尾さんが講演にVTRを使いたかったようですが、事前の打合せが不足だったのでは(市内・鈴木 / 50代 / 女性)

5. その他、シンポジウム全体でお気付きの点があれば、ご記入ください。

- ・ 日の丸(国旗)をかたるべきである。何のためのシンポジウムである(テーマが決まっていないので、何の15年後のまちづくりだ)
- ・ 人口はあらかじめ、おさえるべきである(市内)
- ・ 進化とは？誰が考えたのか？(市内・小川東 / 50代 / 女性)
- ・ 小平から巣立つ人には、「ふるさと」を感じられる町づくりの観点もよろしく。(市内・小川東 / 50代 / 男性)
- ・ 「課題」がばく然とし主旨がなすすぎの様に思った。主旨は何ですか(市内 / 女性)
- ・ タイトルが大きすぎて、パネラーの意見は不消化だったと感じています。それぞれのパネラーの持っておられる課題意識を、別の場でもっと深めるべき。お聞きしたいと考えてます(市内・回田 / 50代 / 女性)
- ・ 玉川上水の文化的価値というのは技術だということをはじめて知った。“まもり”、“育て”、“活用する”小平のキーワードだともう(市内・花小金井 / 30代 / 女性)
- ・ アサヒタウンズ等々にのせて、もっとPRしたらよかったと思う。堀尾アナウンサーを拜見したくて出席しました(東村山市 / 50代 / 女性)
- ・ たまたま鷹の台スポーツセンターで見た市報こだいらでこの催しを知りました。もっとPRをして沢山の人が参加できればよかったのと思います。小平市民ではありませんが参加してとてもよかったです(東村山市・萩山町 / 60代 / 女性)
- ・ 手をつなぐ親の会 矢野さんのお話が良かった(市内・花小金井 / 80代 / 女性)
- ・ 市民も参加したかった(市内・学園東 / 48歳 / 女性)
- ・ もっと学生もきてほしい。ぼくひとりではずかしかった(市内・学園東 / 16歳 / 男性)
- ・ 小林市長はパネラーとして、市長の立場としては「こう考える」という話も聞きたかった。コーディネーターは別立ての方がよいのでは。“市民”の力でというテーマはとてもよかった。次回もぜひ企画して下さい(市内・津田 / 60代 / 女性)
- ・ 感想 気もちよくらせる町づくりに、小平市内に勤めている人間として、おてつだいしたい(多摩地区 / 50代 / 女性)
- ・ テーマが少しバクゼンとして、間のびしていたように感じました。もう少し工夫して2回、3回と重ねてほしいです。市長がコーディネーターをやることには無理がありますね。(市内・津田 / 50代 / 女性)
- ・ 具体性に欠ける議論が多かった。文化の薫り豊かな街 小平づくりが基本ではないかと考えます。(市内・津田 / 50代 / 男性)
- ・ テーマを絞ればの提言。2004年景観法の活用(市内・学園東 / 50代 / 男性)
- ・ 市の大きな地図をパネル(スクリーン)で示すか、配布資料の中に加えるとよかった(多摩地区 / 40代 / 男性)
議論が具体的に進まなかったのは不満。特に、小平のまちづくりの面から3・3・8号線の阻止に向け、市民、行政が一体となってほしい(小平・津田 / 63歳)
- ・ 活発な意見が聞けて良かった(市内 / 67歳 / 女性)
- ・ もう少し年齢の若い人々も入れて欲しい(10代、20代、30代、40代)男女半々ぐらいのパネラーだと良い。
新住民だけでなく、代々住んでいる人々(農家、商店、経営者等)もパネラーとしたい。パネラーが6~7名欲しかった。
市長がコーディネーターというのは無理があるかも…。堀尾さんのほうが適任かもと思う。(市長がダメというのではないけれども)パネラーが「一般市民」というのは良かった。第一回目にしてはまあまあ…というところか。
終わりの部分は市長と堀尾さんの対談のようになってしまったのは残念であった。(多摩地区 / 50代 / 女性)
- ・ 今後も、テーマをしぼって参加しやすいシンポジウムなどを適宜やって欲しい。堀尾さんの“底力”垣間見ました。

- ありがとうございました。(市内・小川西 / 61歳 / 男性)
- ・「住民が主体となって動く」こと「待ち」ではなく、働きかけることが大事(市内・回田 / 50代 / 女性)
 - ・「15年後」という設定はどのような理由からでしょうか。その説明が不足している気がしました。もう少しポイントを絞ったディスカッションの方が、良さそうです(市内・花小金井 / 50代 / 男性)
 - ・矢野さんの発言が良かった。こういうシンポ、シリーズ化してよいのでは。(市内・小川東 / 40代・50代 / 男性・女性)
 - ・来場者数が少なすぎ、講演者にも開催を知らない市民にも失礼。広報の仕方を検証し、次に生かしてほしい。広報については一定の経験、知識があるので、助言が必要ならメールを！！(市内・津田 / 40代 / 男性メールアドレスの記載あり)
 - ・障害者団体の人が入っていてよかった。全体的に具体的な話がなされるともっと良かった(市内・花小金井 / 60代 / 女性)
 - ・各街道の立体交差(西武線のフミキリ)(市内 / 70代)
 - ・よい啓発の機会になりました(市内・津田 / 60代 / 男性)
 - ・まとめ不十分(市内・仲町 / 60代 / 男性)
 - ・小平が新しい発想でフレッシュな気持ちでこれからの行政をして下さい(市内・津田 / 50代 / 女性)
 - ・みんなのため将来活動向上したい(市内・花小金井 / 55歳 / 男性)
 - ・テーマがでかすぎてコーディネーターが大変だなと思ってしていました。忙しい市長なのでどこまでシンポジストと打合せができたのかなど心配をしてみましたが、途中からテーマが少しははっきりして進んでホッとしました。さすが堀尾さんでした。来場者が少なく残念でした。でもまたやって欲しいです。告知をされていると思うのですが、公共施設だけでなく駅、大学や郵便局やスーパー、コンビニにもポスターを貼ってもらうなども必要ではないでしょうか。(市内・天神 / 40代 / 女性)
 - ・具体的なテーマで多彩な参加のしくみづくりが急務。～景観への取り組みなどはこれまでの資産も活用できる。一方でつまらなく見た人がいると思われる。(出席者が少ないこともあられ)有能なコーディネーターをたくさん作ること(市内・たかの台 / 50代 / 男性)
 - ・堀尾さんからも指摘があったように、会場との交流もないので、事前に討論の為のテーマ、ポイントなどを公募してその中から問題点をしばったり、参考にしてやればよかったのではないかと。発言できるのを楽しみにしてきたが、それもなく、テーマ倒れの感あり。これを有効にするには、第2回、3回とつづき、具体的に何かみえてくる様にしないと、パネラーにとっても会場参加者にとっても、よりプラスになる様、検討してほしい(市内・学園東 / 64歳 / 男性)
 - ・もう少し参加し易い時間帯を設定して欲しい。PR活動が少ない。大切な事柄なのに参加者が少ない様に思いました。(市内・学園東 / 70代 / 男性)
 - ・テーマが大きすぎて論点が定まらなかったのが残念です。パネラーの選定が疑問。(マニアックな選定?)客観的に小平を見れる人が良かった(市内・学園東 / 40代 / 男性)
 - ・質問時間がないのは残念です(多摩地区 / 50代 / 男性)
玉川上水の問題点がよくわかった。小平の未来を考えていくうちに現在の問題点がうきぼりになったように感じた。現時点で満足せずによりよい暮らしをめざして考えていかなければならないと思った(市内・学園西 / 40代 / 女性)
 - ・パネラーへの質問の時間が必要。庄司氏の歴史中心的発言をもっと将来向けになればと思った(市内・津田 / 73歳 / 男性)
 - ・15年後のこだいらを考える第一歩でありましたネ。行政・市民共に迅速な対応が必要であると感じております(市内・喜平 / 60代 / 男性)
 - ・武蔵市の中で用水(玉川上水)があることを考えこれを生かす方法があれば史蹟として小平市の誇りになると思った(市内・津田 / 60代 / 女性)
 - ・開場が遅すぎる(市内・たかの台 / 60代 / 男性)
 - ・参加をつくる方法は、どのように行ったのですか?もっと多数の市民に参加させたかった。市は、自治会だけでなく、自発的に地域に活動しているグループを把握しています。(防災課など)この活動グループへの直接の働きかけをなぜしないのか不思議です。形式だけでなく、実質的に活動している人たちへの協力を求めてください(市内・小川町一丁目 / 60代 / 男性)
 - ・どんなお困りが身近にあるか、市民に問うべきと思う。私の現在の問題は、北口に霊園があり、石屋さんが多い為、北口側の通りがさびれているということ、NHKが嘉悦大学の1ゼミナールを連れて、取材していたが、そのレポートはどうされていますか?市営の画廊喫茶などオープンさせてみればどうかという提言をします。駅北側を明るくにぎやかな町にして欲しい。私は杉並区や田無で集会所に勤めたことがあります(小平は住んで2年)地域センターのソフト部分が充実していません。ソファがあったり湯茶が呑めたり、お年寄りが寄り合って談話できる場を充実させたらと思います。(市内・美園 駅北側 / 60代 / 女性 住所・氏名記載あり)
 - ・テーマが大きすぎて絞り切れない議論になった。まちづくり議論はある程度分野を特定しないと議論がかみ合わない。(多摩地区 / 50代 / 男性)
 - ・若干、具体性に不備あり(小平 / 70代)

- ・ テーマが大きすぎて、議論が発展しづらいのではないかと。経済、福祉、行政の中で、具体的なテーマを提示した方が良かった。市長が市民の代表と一緒に参加したのは良かった。今後もこのような機会を増やして欲しい。

(市内・鈴木 / 50代 / 女性)

- ・ 市長がコーディネータというのはよかった。堀内さんの意見「市が市民の力を借りる市政をして欲しい。」印象に残った

(市内・小川 / 60代 / 女性)

6. あなたのことをおたずねします。

6 - 1 お住まいは？

市内	63
多摩地区	11
都区内	1 76
都外	1
その他	0

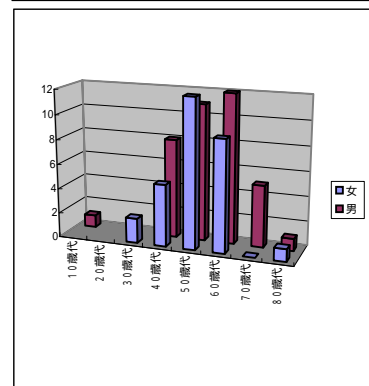
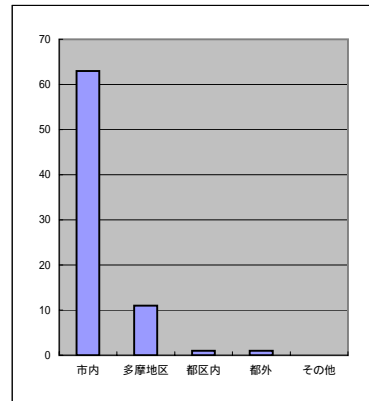
(小平市内の内訳)

大沼	中島町	小川東 4	上水南 2
津田 12	回田 4	花小金井 7	美園 4
学園東 6	小川西 2	仲町	天神 2
たかの台 3	学園西	喜平	小川町 2
鈴木	(町名)内記載なし 9		

6 - 2 年齢と性別は？

	女	男
10歳代		1
20歳代		
30歳代	2	
40歳代	5	8
50歳代	12	11
60歳代	9	12
70歳代	0	5
80歳代	1	1
	29	38
	67	
60歳代のみ(性別不明)	2	
70歳代のみ(性別不明)	2	
40歳代・50歳代	1	1
女性のみ(年齢不明)	2	
男性のみ(年齢不明)		1
年齢・性別なし		1
	10	
合計	77	

1枚のアンケートに2名で記載(年齢の内訳は不明)



「シンポジウム 15年後の「こだいら」の未来を考える」

ご来場の皆様にお伺いします！

小平市都市経営部（計画調整）

該当の個所に、ご記入または を付けてください

1. この「シンポジウム」について、どこでお知りになりましたか？
市報こだいら ポスター チラシ その他（ ）

2. このシンポジウムの全体の内容や構成はいかがでしたか？
非常に良かった 良かった つまらなかった 退屈だった

3. 特に印象に残ったところは？（複数回答 OK です）
基調講演者の人柄 基調講演の内容 各パネラーの人柄
各パネラーの発言 コーディネーターの人柄 コーディネーターの発言
その他（ ）
内容等で印象に残った部分で、具体的なところがあればご記入ください。
（ ）

4. このシンポジウムの受付・案内等について
 - 4 - 1 市職員の対応や言葉づかいについて
良かった ふつう 悪かった
 - 4 - 2 特に、対応等でお気付きの具体的な点がございましたら、ご記入ください。
（ ）

5. その他、シンポジウム全体でお気付きの点があれば、ご記入ください。

6. あなたのことをおたずねします。
 - 6 - 1 お住まいは？
市内（ 町在住） 多摩地区 都区内 都外 その他
 - 6 - 2 年齢と性別は？
（ 歳代）（女性です。 男性です。）

ご協力、ありがとうございました。回収箱へ、そのままお入れください。

シンポジウム 15年後の「こだいら」の未来を考える 報告書

発行年月日 平成 18 年 (2006 年) 6 月
編集・発行 小平市企画政策部 政策課
住 所 〒187 8701
小平市小川町二丁目 1,333 番地
電話番号 (042) 341-1211 (代表)
ファックス (042) 346-9513

120円